

東日本大震災 釜石市証言・記録集

伝えたい 3.11の記憶

釜石市





あいさつ

歴史は過去の囁語に非ず

現代の警策にして

未来の指針なり

平成23年3月11日、14時46分に発生した巨大地震による大津波は、当市において、死者・行方不明者を合わせ、1,040名に及ぶ尊い命を奪い去りました。特に鵜住居地区の犠牲者は、住民の8%を超える痛ましい結果となりました。

今回の震災で犠牲となられた郷土史家である昆勇郎氏は、生前「歴史は過去の囁語に非ず現代の警策にして 未来の指針なり」という言葉を私たちに問いかけておりました。囁語とは、「たわごと」、警策は、「座禅に使う板のむち」を指し、人の自覚などを呼び起こすことを意味する言葉です。

三陸沿岸では、これまでも津波の被害が繰り返され、沿岸各地には、明治、昭和の大津波を伝える記念碑や教訓などが数多く残されています。しかし震災以前、私たちはこれらの先人が残した思いに十分心を傾けることができていたでしょうか。鵜石町にある明治の大津波を伝える碑には、「この碑が減しようとも、この恨みは消えない。恨みは消え去っても、この碑が消えることはない」との意味が漢文で刻まれています。百年以上の年月を隔てた今、私たちは、先人が伝えようとした切実な思いを共感することができます。

私たちは、将来にわたり、二度とこのような悲劇を繰り返してはならないという固い決意のもと、震災で起こったことを書き記し、後世に伝えることが重要であり、犠牲となられた方々の鎮魂にもつながるものと考えます。

このことから、市では、被災者の住民を主体とした震災検証委員会を設け、これまで6編にわたる検証報告書を取りまとめました。

本書では、これらの資料をもとに、住民の避難行動に関わる証言について、自宅、外出・仕事先、海・沿岸など震災時に置かれた状況ごとに整理し、「なぜすぐ避難したのか、避難しなかったのか、避難できなかったのか」を明らかにすることに努めました。

そのほかにも、放課後となっていた多くの小、中学校の子どもたちが、状況を適切に判断して避難することができたこと。多くの犠牲が生じた鵜住居地区防災センター、震災発生直後の市災害対策本部の状況などを掲載しています。これと併せて、教訓集『未来の命を守るために』を作成し、津波から命を守る、つなぐための行動、備えのほか、震災を未来につなげる大切さを取りまとめました。

今回の震災を通じて、地域で語り継がれてき

た大切なことをもう一度思い起こす契機となり、震災で起こったことを、証言・記録として取りまとめることにより、将来にわたり、一人ひとりが自らの命を守ることができるよう、一層の防災意識の啓発につながることを切に願うものであります。

当市は、幾多の津波や戦争による被害を乗り越え、その都度、復興を成し遂げてきました。これからのまちづくり、暮らしに、震災から学んだ教訓を生かし、誇りと希望を持ち、いきいきとこの地で暮らし続けられるよう、美しいふるさととの再興に努めてまいります。

釜石市長

野田武則

Takenori Noda



目次

あいさつ

歴史は過去の^{げいご}噺語に非ず ^{あら}現代の警策^{きょうさく}にして 未来の指針なり
の だ だけ の り

釜石市長 野田武則 3

東日本大震災における 釜石市の被災状況 5

この震災を忘れず、
子どもたちに
伝えるために

過去2回の巨大津波とは違っていた 8

釜石各地域の被災状況

・ 鵜住居^{うのすまい}地区 10

・ 東部地区 12

・ 平田地区 14

・ 唐丹^{どうに}地区 16

3.11 証言 発災時の避難行動 19

逃げた、逃げ遅れた 逃げなかった 逃げられなかった

なぜ、すぐに
安全な高台へ
逃げなかったのか？

・ 自宅 22

・ 外出先 27

・ 仕事先 28

・ 海・沿岸 30

・ 「鵜住居地区防災センター」の事例 32

・ 小学校・中学校・放課後の子どもたち 34

3.11-17 市災害対策本部の7日間 39

災害対応の拠点となる 市庁舎が被災。 一時的にレスキュー機能が喪失。

混乱きわまるなか、
どう命をつないだのか



この教訓集に掲載されている証言は、平成23年11月に市内全世帯を対象に実施した「3.11 東日本大震災アンケート」の自由記述などを中心として取りまとめたものです。



この震災を忘れず、 子どもたちに 伝えるために

東日本大震災における 釜石市の被災状況

2011年（平成23年）3月11日、午後2時46分。
太平洋三陸沖を震源とする地震が起きた。
地震の規模を示すマグニチュードは9.0。
海底の岩盤が広範囲に大きく動いたため
各地に巨大な津波が襲来した。
そして各地に大きな被害をもたらした。



釜石市内の最大遡上高 32.87 m

※東北地方太平洋沖地震津波合同調査グループ（TTJS）調査



過去2回の巨大津波とは違っていた 釜石各地域の被災状況

東京気象台（現・気象庁）による観測開始以降、釜石市は2回の地震に伴う大津波を経験している。

1896年（明治29年）6月15日の「明治三陸地震」では、地震の規模はマグニチュード8.2と推定されるが、現釜石市東方沖の海底が幅50km、長さ210kmにわたり数分間をかくて12～13mゆっくりずれ動く地震であったため、大きな揺れはほとんど起こらなかった。しかし、地震発生から約30分後に襲来した津波は、岩手県気仙郡綾里村（現・大船渡市三陸町）近隣で38.2mの最大遡上高を記録する、当時の観測史上最大の津波となった。釜石市では最大15.1m（唐丹湾小白浜）を記録し、人口12,489人のうち6,687名が亡くなった（資料 釜石市誌通史）。

また、1933年（昭和8年）3月3日に発生したマグニチュード8.1の「昭和三陸地震」でも、三陸地域は軒並み震度5を記録したが、地震による被害は少なく、その後に発生した津波により甚大な被害が起きた。この地震は、陸側のプレートに沈み込む前の海洋プレート内部を震源とする正断層型の地震と呼ばれるもので、大きな津波が発生する恐れがある。この時の津波の最大遡上高は綾里村の28.7mで、釜石市内では最大11.8mであった。津波は第6波まで襲来し、釜石市では人口31,637人中164名（行方不明240名）が命を落とした（資料 釜石市誌通史）。両地震による津波は、高い波が激しく打ち寄せるものであり、従来の津波防災は過去の津波被害を元に計画された。

しかし、今回の東日本大震災における津波は、最初は緩やかな海面上昇から、それに続く急激な高い津波というもので、陸地に到達してから水勢が弱まらない特徴があった。これは、今回の地震の震源域が、岩手県沖ノ茨城県沖に及ぶ幅約200km、長さ約500km、およそ10万km²の広範囲にわたったことに起因する。広い範囲で盛り上がった大量の海水が陸地を襲ったのである。

被害状況（人口・犠牲者・家屋）

地域名	人口	世帯数	死亡者	行方不明者	死亡・行方不明者合計	全壊住宅	半壊・大規模半壊合計
東部地区	6,971	3,336	213	16	229	1,238	482
平田地区	3,848	1,539	22	2	24	209	98
鵜住居地区	6,630	2,657	458	122	580	1,653	198
唐丹地区	2,106	805	19	2	21	292	110
中妻地区	4,856	2,232	24	2	26	—	—
小佐野地区	8,308	3,877	25	3	28	—	—
甲子地区	6,014	2,633	10	2	12	—	—
栗橋地区	1,263	482	4	3	7	—	—
合計	39,996	17,561	775	152	927	3,392	888

※死亡者合計775名は釜石市内での遺体収容数888名のうち釜石市に住民登録されていた人数

※人口・世帯数は平成23年2月末現在の住民基本台帳による

※死亡者、行方不明者（犠牲者）数は、平成25年1月22日現在、釜石市内で遺体が収容された死亡者数並びに行方不明者数で、震災時の住民基本台帳の現住所区分による

※全壊住宅、半壊・大規模半壊（家屋）合計の数は平成25年1月1日現在、税務課で実施した家屋損壊調査（津波被災分）のうち、住家及び非住家の合計数である

※P.11、P.13、P.15、P.17についても同基準で作成

各湾の特徴

大槌湾 ゆるいV字形の海底谷と湾奥まで深く落ち込んだ海底地形を持ち、湾口幅に対して奥行きが長い狭長な湾形を持つ。

両石湾 地図上では湾口部の大きく開いたV字形の湾だが、海底は狭小なV字谷の地形で、いずれも狭い開口部を持つ面積の大きな湾といえる。



東日本大震災津波浸水域

釜石湾 三陸リアス式海岸の中では小規模な湾といえるが、開口比（湾域面積÷湾口幅から算出した値）が小さく、また海底は狭く湾曲した地形で、高い波が発生するといわれている。

唐丹湾 釜石市沿岸4湾の中でもっとも小規模だが、開口比は両石湾と同規模である。1896年（明治29年）、1933年（昭和8年）の両地震でも大きな津波被害を受けた。

うのすまい 鵜住居地区

大槌湾の湾奥に広がる鵜住居町と、両石湾湾奥に位置する両石町を中心に、両湾の間に伸びる箱崎半島に点在する集落が鵜住居地区と呼ばれる。北側は大槌町に接する釜石市沿岸部では最北の地域である。

江戸時代頃より、豊富な海産資源を求めて漁民集落が形成されたが、1969年（昭和44年）に鳥谷坂トンネル開通など、釜石市街地に近く交通の便もよくなったことで東部地区に勤務する住民のベッドタウンとして人口が増加した。

震災当日も、鵜住居町の鵜住居川・両石町の水海川を遡上した津波が住宅地に溢れ、2,657世帯6,630人の人口のうち、580名が犠牲・行方不明となった。同地区の死亡率は8.75%で市内で最も高い。特に箱崎白浜（10.85%）、室浜（10.66%）、鵜住居（10.02%）が高率となっている。



両石町



箱崎町 仮宿



箱崎町 箱崎

被害状況（人口・犠牲者・家屋）

地域名	人口	世帯数	死亡者	行方不明者	死亡・行方不明者合計	全壊住宅	半壊・大規模半壊合計
鵜住居	3,534	1,440	305	49	354	757	112
根浜	173	67	12	2	14	75	1
両石	675	292	27	18	45	243	16
片岸	662	275	26	7	33	181	18
室浜	197	78	13	8	21	83	3
箱崎白浜	387	133	23	19	42	52	13
仮宿	80	28	2	5	7	11	2
箱崎	734	273	47	14	61	208	27
桑ノ浜	121	52	3	0	3	43	6
外山	67	19	0	0	0	0	0
合計	6,630	2,657	458	122	580	1,653	198



根浜海岸レストハウス（鵜住居町・根浜）



東部地区

釜石湾の湾奥に丸く突き出た鎌崎を境に、湾岸北側の地域が東部地区と呼ばれる。この地域は市の中心部で、沿岸部は漁業で栄えた頃の旧市街の沿岸地区、市庁舎等もある市街地区、旧漁村部の松原・嬉石、丘陵部の大平地区で形成されている。

かつては三陸リアスと広大な大陸棚、そして天然の良港を持つ漁業の町として栄え、明治中期に製鉄業が盛んになると、近代製鉄発祥の地として人口が増加し、市街地区では、中央を流れる甲子川^{かつし}に沿って内陸へと都市化・宅地開発が進んだ。

震災前の人口は3,336世帯6,971人にのぼり、市街地区に約半数が集中していた。229名の犠牲・行方不明者のうち約140名が沿岸・松原・嬉石・大平地区の方であった。同地区の死亡率は3.29%であるが、特に新浜町(6.83%)、只越町(6.82%)、嬉石町(5.26%)が高率となっている。



浜町



釜石警察署・嬉石町



釜石市保健福祉センター前・大渡町

被害状況(人口・犠牲者・家屋)

	地域名	人口	世帯数	死亡者	行方不明者	死亡・行方不明者合計	全壊住宅	半壊・大規模半壊合計
沿岸	新浜町	205	103	10	4	14	72	21
	東前町	394	187	14	1	15	116	20
	魚河岸	1	1	0	0	0	2	7
	浜町	940	447	36	2	38	211	44
	合計	1,540	738	60	7	67	401	92
市街地	港町	129	57	5	1	6	78	17
	只越町	704	341	47	1	48	272	48
	天神町	258	119	3	0	3	8	21
	大只越町	825	388	0	0	0	3	26
	大町	574	287	20	0	20	146	98
	大渡町	594	282	11	1	12	86	101
	鈴子町	92	52	0	0	0	1	11
	駒木町	123	61	2	0	2	0	6
	合計	3,299	1,587	88	3	91	594	328
松原 嬉石 大平	松原町	454	230	22	0	22	102	35
	嬉石町	856	402	39	6	45	137	7
	大平町	822	379	4	0	4	4	20
	合計	2,132	1,011	65	6	71	243	62
総計		6,971	3,336	213	16	229	1,238	482



港町



嬉石町



平田地区

釜石湾の湾奥の鎌崎より南側の釜石湾沿岸地域が平田地区と呼ばれる。

釜石湾の内湾である平田湾の湾奥の河口に平田地区、南側の尾崎半島の付け根に位置する尾崎白浜・佐須地区で形成されている。

国道45号により、沿岸地域を南北に結ぶとともに、地区の中心部に三陸鉄道南リアス線・平田駅があり、利便性とあわせて人口が増加した。

震災時には1,539世帯3,848人が住んでいたが、24名が犠牲・行方不明になった。同地区の死亡率は0.62%となっている。



平田 下平田



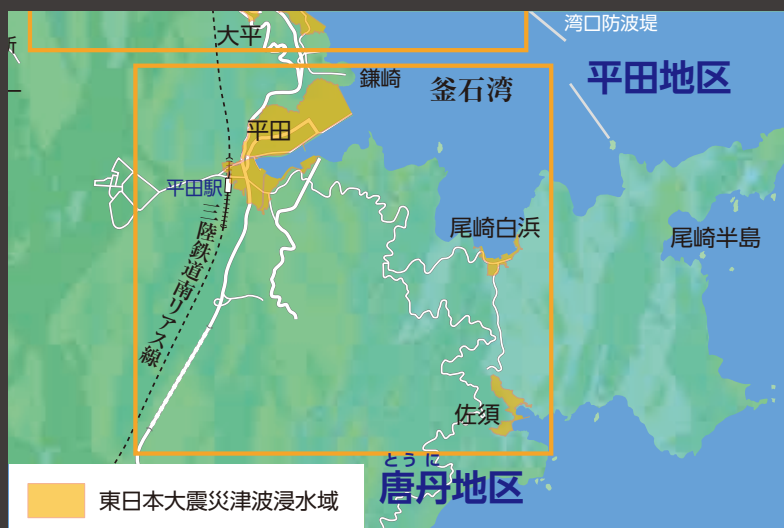
平田 佐須

被害状況(人口・犠牲者・家屋)

地域名	人口	世帯数	死亡者	行方不明者	死亡・行方不明者合計	全壊住宅	半壊・大規模半壊合計
平田	3,410	1,389	20	2	22	171	93
尾崎白浜	340	124	2	0	2	26	2
佐須	98	26	0	0	0	12	3
合計	3,848	1,539	22	2	24	209	98



平田 下平田



平田 下平田

唐丹地区

唐丹湾沿岸の地域が唐丹地区と呼ばれる。

大船渡市三陸町に隣接する、釜石市最南端の地区である。釜石市域ではこの地区だけが江戸時代には旧仙台藩領に属していた。

片岸川と熊野川が流れる湾奥の低地帯と、唐丹湾内が主な居住地区で、古くから漁業の町として栄えた。今日でも漁業を核とした水産業を主要な産業とする。この地区でも、津波が川を逆流して低地部の内陸深くまで津波被害が及んでいる。

今回の地震では805世帯2,106人のうち21名が犠牲・行方不明になった。同地区の死亡率は1.00%となっている。



唐丹町 小白浜



唐丹小学校・唐丹町 片岸

被害状況(人口・犠牲者・家屋)

地域名	人口	世帯数	死亡者	行方不明者	死亡・行方不明者合計	全壊住宅	半壊・大規模半壊合計
花露辺	211	71	1	0	1	22	10
本郷・大曾根	488	190	4	0	4	49	10
小白浜	548	224	4	0	4	82	47
片岸・川目	368	134	8	0	8	74	29
荒川	342	125	2	2	4	53	8
大石	122	52	0	0	0	12	6
山谷	27	9	0	0	0	0	0
合計	2,106	805	19	2	21	292	110



唐丹町 大石



唐丹町 片岸



只越町

3.11 証言

発災時の避難行動

逃げた、逃げ遅れた 逃げなかった 逃げられなかった

これまで経験したことのない激しい揺れに
「ただごとではない」と異変を感じながら
すべての人が素早く
避難を始めたわけではなかった。

なぜすぐに 安全な高台へ 逃げなかったのか？



あ の日、強く長い揺れに「ただごとではない」と恐怖を覚えながら、すべての人が即座に避難行動に移ったわけではなかった。散乱した室内の片づけを始めた人、防災リュックを玄関に置いて様子を見ていた人、ここまで津波は来ないと楽観した人、一度は避難しながら忘れ物を取りに戻った人、あわてて自分では思いもしない行動をとってしまった人……。

なぜ、すぐに安全な高台へ逃げなかったのか。

一般に、自分にとって都合の悪い状況・情報
一 がもたらされたとき、その危険性を過小評価してしまいう人間の特性（正常化の偏見）があることは知られている。たとえ危険と判断しても、避難場所や手段に不安があれば、あえて避難することなく、その場に留まることも考えられる。さらに、個人の置かれた状況（立場）、知識や経験によって、避難するか否か、判断は分かれる。

いずれにしても、津波災害では、地震から津波襲来まで、ごく短い時間に「避難」の意思決定をする必要があるため、強い動機、働きかけが必要になる。

では、震災当日、何が人々の避難行動を促したのか、あるいは妨げたのか。避難が遅れた理由は何だったのか――。



さまざまな状況にあった市民に、それぞれの避難行動を語ってもらった（「未来の釜石市民へのメッセージ」3.11の教訓）。＊アンケート調査と同時に実施回収。また、その証言をもとに※「避難行動を促した要因」「妨げた要因」を整理、分析した。

※紹介するのは一部だが、実際には1,690人を超える市民の証言を聞き取った。

自宅..... 22

外出先..... 27

仕事先..... 28

海・沿岸..... 30

「うのすまい 鶴住居地区防災センター」の事例 32

小学校・中学校・放課後の子どもたち.. 34

証言

自宅、仕事先、沿岸、学校……。それぞれの避難行動



鵜住居町 日向

証言 自宅

わずか数分、数秒が
明暗を分けることになるとは

3.11 証言

小白浜●女性（60代）

海鳴りに続き廊下に水
何が起きたのだろう

いつもと違う長く強い揺れに、家の倒壊が頭をよぎり、外へ出ました。揺れが止んで戻ると、防災無線で3mの大津波警報が発表されました。でも、「自宅は高台だし、12mの防潮堤があるから大丈夫」と思い、散らばった画鋲を片付け始めました。

まもなく、聞いたこともない海鳴りがして、玄関から続く廊下に水が入ってきました。何が起きているのか理解できませんでしたが、なんとなく家には危険な気がして、水の量も足が隠れるくらいだったので、家を出て高台に向かいました。高台に着いてびっくり。旧45号線の下は湖になっていました。

その後、繰り返し余震と津波のため

自宅に戻ることができず、友人宅に避難しました。

根浜●女性

指定避難所だからと
安心していた

地震が発生したときは自宅にいました。近所の住民を高台の畑に集めました。畑は見晴らしがよく、海の様子が確認できました。赤ちゃんのいる方や車のある方は、できるだけものを積み込み、車で指定避難所へ移動しました。それ以外の人は、津波が堤防を越えたのを見てからいっせいに指定避難所に移動しました。

助かったからよかったものの、もっと高い所に移動するべきだったかもしれません。じつは日ごろ、お父さんから「津波は3倍で来るから、警報が3mならば9mの

が来る」と聞いていて、家族で指定避難所より高い裏山に登る案も話し合っていました。あの日は、指定避難所だからと安心して、より高い所に行こうとは思っていませんでした。

大渡町●女性（40代）

大きな黒い蛇が鎌首を上げたような

地震のときは、着の身着のまま、手元の靴と上着を取り、避難所の釜石小学校へ向かいました。

地震からすでに5分経過していましたが、裏通りが車が数珠つなぎで、動いていませんでした。その間を縫うように横切り、学校へ上がる坂道を登りました。そのとき、大きな黒い蛇が鎌首を上げるように津波が襲ってくるのが見えました。周囲の人と「夢じゃないよね」と嘆きながら、自分の町が襲われていくのを、黙って見ているしかありませんでした。

大町●女性（60代）

マンホールから下水が 高く吹き上げた

揺れが収まったとき、非常持出し袋を玄関に置き、位牌を袋に入れ、避難

の準備をしておりました。娘が会社から戻ってきたので一緒に逃げました。

自宅を出ると、マンホールからは下水が高く吹き上がり、浜町のほうはすでに砂煙が上がっていました。娘に引張られ、近所の薬師寺へ行き、階段を3段上がったところで波が来しました。娘が来てくれなかったら、私の足では生きていなかったと思います。

鶴住居町●女性（80代）

スマトラの津波と同じ 山に逃げなくちゃ！

自宅でのんびりとテレビを見ていたとき、大きな揺れが起きました。食器が落ちないよう食器棚を押さえたのですが、揺れは長く、止みません。主人が外出先から帰ってきて「食器はいいから外に出ろ」と言うので、避難することになりました。

主人は、近所の方々と先に避難所へ向かいました。私は、近所のお友だちの家に寄り、避難を呼びかけました。みな、なんとものんびりしていました。「忘れものがあるから、先に行つて」「津波？じゃあ、避難するか」…。

山岸の側溝に登った途端に、バリバリと音がしました。振り返ると、はるか彼方から土煙を上げ、電柱を倒しながら



大町

ら、津波が来るではありませんか。その瞬間、私はテレビで見たスマトラの津波を思い出し、「避難所ではなく山に登ろう」と思いました。

登っても登っても、津波が追いかけてきました。途中、「お父さくん、お父さくん」という声が聞こえたので振り返ると、近所の方が3人流されていました。戻つて何とか3人を引張り上げることができましたが、心の中で「私も流されるかもしれない」と思いました。

結局、一緒に逃げた30人ほどは山のおかげで助かりましたが、山の上から見た光景はいまも鮮明に覚えています。

「我が家が残っている！」と思ったのも束の間、大きな建物が流れてきてぶつかり、壊れてしまいました。あるいは、逃げ遅れた人々が屋根の上やベランダで、渦巻く波に乗って流れてきました。やがて家は傾き、その方たちは海の中に落ちていきました。何もすることができませんでした。

駒木町●女性（60代）

息子を亡くした直後で 逃げる気力もなかった

大地震が起きたとき、ただごとではないと思いましたが、現住所へ移つてから半年しかたつていなかったのに、地域のことでも避難場所も知りませんでした。「避難してください」と叫んで走っていく方がいましたが、私は家にいました。

しばらくして外を見たら、橋の3倍もの高さの黒い波が見えました。「いまから逃げてもまにあわない」と思いました。8か月前に息子を亡くして気力のないときでしたから、死ぬことになっても諦めの境地でした。

すぐに波が押し寄せてきて、大きな波が寄せたり引いたりを繰り返して、その後少しづつ、波が低くなっていききました。幸い、波は家まであと5cmのところまでまりました。

うらいし
嬉石町●女性（70代）

水が口元まで来て 死を覚悟した

地震発生時、家の外にいました。建物や大地が大きく揺れ、電線はものすごい唸り声（うなり）を上げており、「大地が割れて飲み込まれるのではないか」と、恐ろしくてたまりませんでした。

揺れが収まってから家の中に入り、ちよつと片づけをして、さあ避難しようかというとき「津波が来たぞう」と叫ぶ声。窓から下を見ると、車がものすごいスピードで流れ、泥水とガレキが押し寄せてきました。

「もう避難どころじゃない。でも、2階までは来ないだろう」。その途端、床下からぐんぐん浸水し、あつという間からだが浮き上がりました。机の上に乗りましたが、それも束の間、足は机から離れ、頭部は天井に着き、水が口元まで来しました。死を覚悟しました。釜石を離れている2人の子供たちにサヨウナラを言いました。せめて、遺体だけでもこの部屋で見つかりますようにと念じながら。

その後、水が引き始めてホッと



鶴住居町 新川原

しましたが、「また来るかもしれない、早く逃げなくちゃ」と、家具や備品が散乱するなか、なんとか階段までたどり着きました。でも、階段の下はものすごいガレキで、とても素足では歩けません。「運を天に任せ、ここにいるしかない」と、ずぶぬれで寒さに歯をガチガチ鳴らしながら、ひたすら助けを待ちました。

けろべ
花露辺●女性（70代）

経験のない揺れ 津波が来る！

経験のない大きな地震だったので、すぐに「津波だ」とわかった。倉庫のストローブを消して夫婦で道路に飛び出したら、近所の人も出てきて、口々に「大きな津波だぞ」と言っていました。

揺れが収まらないうちに堤防の内側の波が引いていくのが見えたので、女性は皆、漁村センターに避難しました。津波だとわかったら、高い所に避難する以外に安心は得られないと思います。

浜町●女性（80代）

警報はガアガアとしか 聞こえなかった

どれほど時間が過ぎたでしょうか。安否を確かめる男性の声が聞こえました。その方に履物を持つてきてもらい、ガレキを乗り越え、避難所に行くことができました。夫も波にのまれましたが、弛んでいた電線をたぐり寄せて電柱にしがみつくことができ、助かりました。自宅は山に近いのに、すぐに逃げなかったことが悔やまれます。

今回の地震は、いままで以上に大きくて、テレビが斜めに動いたり、本棚の上の人形ケースが落ちてきたりしたので、外のほうが安全かもしれないと考え、外に出ました。ご近所のみなさんも外に出てきていたので「怖いね、怖いね」と話したり、あるいは抱き合ったりしていました。

そのなかを、「6mだつてよ」と言っただけで通り抜けていった友がおりました。なんのことも理解できませんでした。警報は出ていましたが、耳が遠いこともあり、「ガア、ガア」としか聞こえませんでした。水門からどんどん出てくる海水が「どのあたりで返るのかしら」と思いながら見ていました。

消防団の方たちに叱られて、山のほうに逃げてなんとか助かりました。

平田●女性（40代）

ケータイのテレビで 迫る津波を知った

自宅の2階にいました。家が倒壊しても屋根を破れば逃げられると思い、押入れ付近にいました。揺れが弱くなったとき、「いましかない」と思い、家を出て高台の避難所に逃げました。祖母から「何も取らずにすぐ高台へ逃げろ」と

聞いていたので、車も何もかも置いて。

避難所では「ここは海拔6mなので大丈夫」と説明され、「津波は3mだから大丈夫だな」と思っていました。しかし、ケータイでTVを見ていたら、すぐ近くまで来ていました。荒れ狂う水龍のような水の塊が走り抜けました。すべてをぶち壊し、ものすごい速さで。

私は「すべて終わった」と思い、力を失いましたが、とにかく無我夢中で走り、さらに高台へと逃げました。

箱崎町●女性

集落は不気味なほど静まりかえっていた

揺れが収まると、すぐに孫のいる保育園に行きました。若い先生たちがオロオロしていたので、高い所に逃げるように指示をしました。

その後、自宅に戻り、隣のおばあさんに避難の声をしましたが、「ここまで来ないから」と逃げようとしません。周辺の住民と説得して、どうにか車に乗せて山に登りました。

いま思うと、あのとき集落全体は、不気味なくらい静まり返っていました。住民が逃げなかったからです。みな、ここまで津波が来るとは思っていなかったのだと思います。

只越町●男性（80代）

屋根に上がりしがみついていた

「まさか3階までは来ないだろう」と油断したのがまちがいでした。気づいたときには、7〜8mの津波が迫っていました。大変なことになると思い、3階の窓から鉄梯子に上り、妻の尻を押し上げて屋根に上げ、自分もあとから屋根に上がり、必死にしがみつきました。

隣近所の家が流されていくのが見えませんでした。見るに忍びない光景を、ただ茫然と見ていました。何気なしに我が家の裏山の避難道路のほうを見ると、近所の人たちが大勢こちらを見ていて、「がんばって！」と声をかけてくれました。よく助かったものだと思います。

両石町●女性（70代）

走っても走っても追いつてくる波

高台の造成地（昭和三陸津波後に造成）に住んでいました。あの日は、1回目地震のあと、低地に住むお年寄りやからだの不自由な方が車で隣近所に避難してきました。空き地にも自家用車がつぎつぎと避難してきました。私は、断水に備え、ポリ缶や風呂に水を貯め

ました。

2度目の地震のとき、揺れの強さに驚いて外に出て、低地を見ると、大きなイカ釣り船が横になつて押し流され、家も押し流されていました。びっくりしましたが、それでも、なぜか逃げることは頭に浮かばず、「いまの状況をカメラに収めておこう」と、家に戻ることを考えました。夫に相談すると「昭和の津波はここまで来なかったから大丈夫だろう」と言いました。

カメラを持ち出し、玄関で戸締りをしていると、男の人が「津波が来たぞ」と叫んで走っていきました。見ると、坂道を道幅いっぱい、津波がもくもくと上がってきました。夫の姿は見えませんでした。心の中で「ごめん」と言い、山へと走りました。

走っても走っても、波は足元まで追いついてきました。急な坂道で、心臓はどきどき、ひざはガクガク。「もうダメかも」「いや助かるかもしれない」。最後の力を振り絞り、走りました。山頂まであと5mのところまで動けなくなりましたが、幸い、津波は（私から）1mの距離で止まりました。

いつもの地震ではいち早く高台に行くのに、なぜ今回はそれができなかったのか、悔しいです。夫は2回目の津波で流されたようで、いまだに行方不明です。

どこにいるのか、寒さが厳しくなるのに、いまも「もしや」と思う日々です。

松原町●男性

ハザードマップでは自宅はぎりぎり浸水外

揺れのあと、一旦、隣に住む兄の家に駆け込みましたが、普段と変わらない様子だったので、家に戻りました。

1〜2分後、近所の人から「津波が来る」と声をかけられました。妻にも避難を促されましたが、信じられなかった。ハザードマップでは、自宅は外側すれすれだったし、湾口防波堤や川の堤防のかさ上げも終わっていたので、ここまですで津波が来るとは思えなかった。これまでも幾度か津波を経験していましたが、「自宅まで津波が来たら、市内（東側）は全滅」との固定観念もありました。

しかし、妻が外へ出ると玄関まで水が来ていたので、逃げるタイミングを失いました。2階へ駆け上がりました。窓を開けると、すでに水位1mほど。まもなく、玄関横の窓から津波が押し寄せ、同時に家が浮き、家ごと流されました。20〜30度ほど傾いて流され、止まったときにはガレキの上でした。窓から外へ脱出すると、60〜70m先で妻が手を振っていました。

大曾根●女性(70代)

ドーン、ドーン、ドーン
「いまの音はなんだべ？」

いま思い出してもゾッとします。避難しているとき「ドーン、ドーン、ドーン」と3回、爆発したようなものすごい音が、沖のほうから聞こえました。打ち上げ花火のような音でした。一緒にいた人たちは「いまの音はなんだべ？」と言っていました。

私は母から、昭和8年の地震のときに爆発音がしたことを聞いていたので、「大きな津波が来るかもしれない」と思いました。まもなく津波が来て、家を流し、山の杉を押し倒し、何とも言えない光景でした。

大町●女性(60代)

ずぶ濡れのまま
15時間、救助を待った

あのとき、私は逃げ遅れた隣近所の方々と胸まで海水に浸かり、目の前が渦となり、渦に足を取られて流されそうになっていました。管理人さんを引っぱり上げ、生後50日の子どもを抱っこした親を、背中や壁に押しつけ

て踏ん張りました。

その後、海水は引いたものの、からだはずぶ濡れ、朝まで寒さとの戦いでした。ともに話をしたり、足を動かしたり、手を上げたりして、明け方まで15時間ほど、救助を待ちました。あのような状態で、よく助かったと、いまでも鳥肌がたつ思いです。

大曾根●女性(70代)

慌てて考えてもみない
行動をしてしまった

大きな揺れに、何も持たず、慌てて高台に逃げました。あとから、荷物をもつてゆっくりと上がってきた人がいたので、「自分も」と思い、大事なものを取りに自宅へ戻りました。

家に入った途端、地鳴りと大きな揺れ、「津波が来たぞ」という声。結局、何も持たずに夢中で逃げました。草むらを取り、県道に上がりフェンスを越えたところで振り向くと、波しぶきが山のように見えたので、さらに上の杉山に登りました。また振り向くと、自宅が流されていました。茫然として、泣くこともできませんでした。

過去に2回も流された土地に住んで

いて、津波について少しは勉強しているつもりでした。でも実際のこととなると、慌てて、考えてもみない行動をしてしまいました。

鶴住居町●男性(70代)

バカ、ここまで来る
津波があるか！

1回目の揺れが収まり、家の中で片付けをしていると、再び揺れ始めました。外出先から戻った妻が「危ないから外に出て」と叫ぶので、庭先へ出ました。電線の音がすごかった。

しばらく、妻と隣人と3人で様子うかがっていると、人々が高台に向かって避難するのが見え、妻が「みんなが逃げているから、私たちも」と言いましたが、「バカ、ここまで来る津波があるか」と、逃げようとは思いませんでした。

しかし、妻に強く言われ、警報が解除されればすぐに戻れるものと思い、何も持たずに逃げました。背後、遠く海岸方面に黄色い煙のような大きなものが上がるのが見えました。30秒も遅れたら、津波に巻き込まれたことでしょう。

亡くなった方のケース

遺族や地域の証言から

自宅に留まり避難が遅れ、流されて亡くなった。

数度の避難の呼びかけにも応じず、自宅に留まり亡くなった。

いったん自宅上層階に避難するが、階下に入り、流されて亡くなった。

地震のあと片づけに手間取り、流されて亡くなった。

外出中の家族の帰りを待っていて、流されて亡くなった。

証言 外出先

不慣れな場所で被災したとき 人々はどう動いたのか

3.11 証言

天神町●（ウォーキング中）女性（60代）

津波が来る？ でも
自宅には妊婦の娘がいる、
帰らなければ

主人と2人で駒木の山へのウォーキング帰りに、強い揺れに襲われました。立っていられずガードレールにしがみつき、ただごとではないと。妊婦の娘が家で留守番をしていたので、携帯で避難連絡しようにもつながらず、焦りました。知らない人から「大津波が来るから戻らないほうがいい」と言われましたが、ただただ「家に帰らなければ」と思っていました。

津波が来るまで時間があつたので、家に帰ることができました。娘は仙寿院に避難していたので、私たちもそのまま仙寿院に避難しました。その日はとても寒く、主人にオーバーを家に取り

りに行ってもらいました。そして7、8分後だったと思います。自宅に津波が押し寄せたのは……。もし、家に服を取りに行ったときに津波が来たら……。そう思うと身震いがし、主人にはとてもないことをお願いしてしまつたと、とても反省しています。

平田●（鶴住居地区防災センターで卓球中）女性（70代）

津波だ、津波、津波……
呪文のごとく口にしながら
自宅へ車を走らせた

あの日、私は鶴住居地区防災センターの2階ホールで、仲間と卓球を楽しんでいました。突然、ドドドツという地響きとともに激しい揺れ。立っていられずしゃがみこみ、卓球台の下にもぐり、脚にしがみつकिながら、恐怖

と闘っていました。

少し揺れが落ち着いたとき、「大きな津波が来るかもしれない」と思いました。卓球台を片づけようとしている仲間「早く帰って」と大きな声をかけました。私も、ともかく早く車を動かさねば。この地震なら、両石を通って帰るのは危険と察し、開通したばかりの釜石山田道路で平田に向かいました。トンネルを通過し、低地にある松原、嬉石地区を走り、観音像が見える高地の道路にさしかかったとき、沖合から横一直線になった白波が押し寄せてくるのが目に入りました。「津波だ！ 津波だ！ 津波……」と、呪文のごとく口にしながら、低地に位置する平田まで下り、自宅アパートまで辿り着きました。津波の来襲は、私が通過した4、5分後だったようです。

小川町●（妻の実家）男性（60代）
車のハンドルにしがみつ
目をつぶった
「もう、終わりがもな」

あの日の午後、私は小川にいて、妻の父母の世話をしていました。地震が来たとき、嬉石の自宅にはまちがいない津波が来ると思い、地震が収まると同時に、嬉石に1人でいる父を迎えに

車を走らせました。父は漁師一筋で生きてきましたが、引退後、足腰が極端に弱ってしまい、自力では5mも歩けなくなっていました。

車は、渋滞もなく進みましたが、川の水が引けていたので、時間がないことは察しがつきました。玄関先でウロウロしていた父を車に乗せ、避難所へ。道路が高くなった場所まで来たとき気持ちにゆとりができ、逆流する川を見ていました。「大津波が来ます」と放送されていましたが、緊迫した内容には聞こえず、いま川を逆流しているのが津波なんだと思っていました。

そうこうしているうちに、一気に橋桁を越すような高さの波がやってきました。車を追い越して東門へ入ろうとしましたが、間にあわない。エンジンのは止まり、駅方向へ流されました。左右の歩道柵にぶつかり、泥水が吹き上げる排水溝に向かって流されていく。ハンドルにしがみつき目をつぶった。

「もう、終わりがもな」……。すると泥水が車の横に当たり、反対方向へ流されて、止まった。ドアを開け、水の中から父を引っ張り出す。そのとき、製鉄所の構内から大きな声で「こっちに来い」と叫ぶのが聞こえました。何人かの方が、父と私をロープで構内に引き上げてくれました。

証言 仕事先

職責、家族の心配など 多くの要因が率先避難を妨げた

3.11 証言

東前町●（会社員）男性（50代）

時間的にたどり着けると
思い、流れに逆らい工場へ

地震が発生したときは、東前にある会社に行きました。停電し、携帯も電話もすべての通信手段が遮断されました。まもなく6mの津波警報が出たため、重要な物を車に積みこみ、両石にある工場へ向かいました。人々が避難する方向とは逆です。「時間的に辿りつける」と判断したのです。

トンネルは真暗で、1台の車も走っていません。スピード違反をして走り抜けました。信号も動いてなかったと思います。トンネルを抜けると、巨大な津波が追いかけてくる光景が目に入りました。現実の世界ではない、映画でも見ているようでした。ひたすら両石の工場を目指し、走りました。

工場で、中国人と瓶詰めを載せ、避難しました。九死に一生を得ました。

浜町●（会社員）男性（50代）

シミュレーションなどおりの
避難行動はできなかった

祖父、父から、幼少時から津波に対する準備、行動を具体的に教えこまれ、地震発生のために準備、避難をしておりました。しかし、今回の大震災の際は、考えていた避難シミュレーションどおりにできない部分が多くありました。

たとえば、従業員が「車で帰してほしい」と帰宅を望んだとき、制止できなかった。危機一髪、命を救われたからよかったものの。また、従業員を帰したあとで、びしょ濡れの下着と防寒具を取りに自宅に戻ったため、逃げ

遅れました。4階に逃げ、なんとか助かりました。

唯一の救いは、近隣の婦人を救助できたことです。婦人は津波を受け、ずぶ濡れでしたが、声をかけ続け、翌日やっとの思いで救助することができました。もう少し時間があるものと考えていました。甘かったです。

（歯科医師）男性

スタッフの避難支援が
できなかった

震災以前からハザードマップで浸水範囲や避難場所を確認していた。しかし、ハザードマップに記載されている浸水範囲から1.8kmほど離れていたのに、ここまで来ないと思いいませんでした。

むしろ余震を心配し、みなで建物の外に出ました。ラジオから聞こえてくる情報から状況把握に努めていましたが、「釜石に4mの津波」が来たというのを聞くや否や、津波が、家や車を巻きこんで迫ってくるのが見えませんでした。津波という水のイメージが強かったが、砂煙が上がったり、バキバキと音を立てたりしていて、土石流のようでした。

すでに足元が浸水しているなど切

羽詰まった状態での避難だったので、避難支援をしている余裕がなく、スタッフに「山の方面へ避難するように」と声をかけるのが精一杯でした。スタッフの1人は波に飲まれましたが、波と波がぶつかった拍子に浮き上がり、近くの家屋の屋根に上がり、運よく助かりました。

今回の津波の経験から、情報ありきの行動ではなく、警報が出る前に避難し、来なければ「よかった」と思えるようにしなければならぬと痛感しています。

大町●（飲食店経営）女性（60代）

苦しい、息を吸いたい
上へ向かって泳いだ

ひどい揺れでしたが、その晩は、宴会の予約が入っていて、何ごともなければ来るだろうと、大きな揺れが収まってから夫と2人で仕込みを続けました。

しかし外を見ると、近所の人が逃げるのが見えたので、「やはり逃げたほうがいいだろう」と外に出て、いつも避難訓練をしている薬師公園に向かいました。ところが、信号が止まって車が一杯で、通りを渡れない。そのとき、うしろのほうから「水が来た！」

と声がしました。振り返ると、土の上を転がるように水が見えたので、流されないようにアーケードの柱に掴まり、夫にも掴まるように叫びましたが、その瞬間、左側から背の高さの水と救急車や消防自動車、乗用車などが流れて来て、一瞬にして水の中です。

とにかく苦しいので「息を吸わなくては」と思い、上に向かって必死に泳ぎました。流木らしき物に掴まり、息をしていると、上から「いま助けっから」と声が。自らも流された消防士が、やはり泳いでアーケードの上にいました。背中を掴んで引き上げてもらい助かりました。

夫は翌日、店の中で遺体で発見されました。自分たちの判断の誤りを悔やみきれません。

甲子町●（仕事中心）女性（60代）

水門を閉めに行き 夫は命を落とした

あの日は、仕事で甲子にいました。地震後、主人の携帯に電話しましたがつながりません。「きつと、水門を閉めに行っているんだ」と思い、70%は安心していました。むしろ只越にいる母が心配で、車でこちら方面に向かいました。

しかし、駒木町の道路で大渡川から来る津波に遭いました。水が5mの所まで来たので、すぐにUターンして車でお不動さんに上りました。川を、車やら家が流されていくのを見て、「主人は大丈夫かな、母は大丈夫かな、弟夫婦は」と、身内のことを案じました。眠れぬ夜を二晩過ごし、13日になって旧二中の遺体安置所で夫を確認し

ました。顔には無数の傷があり、水を飲んでいるせいか、少しむくんでいました。泣けて泣けてしょうがありませんでした。

主人は人の喜ぶことが好きで、魚市場開発プロジェクトチームの一員として、がんばっていました。釜石のためにまだまだすることがあるはずと、毎日パソコンと向かい、アイディアを練っていました。志半ばの他界でした。でも、水門を閉めに行ったので、私としては殉職だと思い、「ありがとう」としか言いようがなかったです。「早く見つかってよかった」と言ってくれる人もいましたが、私の心は空っぽです。

（製材所勤務）男性（60代）
車いすのおばが
心配で、ダンプを
飛ばし自宅へ

大槌町の製材所にいるときに地震に遭った。あまりにも大きな地震だったので、「とにかく逃げなければ」と、揺れが収まらないうちに、猛スピードでダンプを走らせて自宅に向かいました。トンネル

内は電気も消えて気持ち悪かったし、途中でおばの家の屋根が壊れているのを見ました。自宅に戻ると、家族には避難指示をして、すぐにバイクでおばを助けに行きました。

おばは兄貴が車椅子で避難所に避難させていました。しかし「波が大きいかから避難所から逃げろ」というので、兄貴と2人でおばの車椅子を運び、参道へ上がりました。危機一髪、助かってよかった。あまりに大きな津波で、今度は我が家の者がやられたかと思い、山を越えて帰る途中、胸が張り裂けそうだった。幸い、無事でしたけど、避難が遅れていたなら、どうなっていたかわかりません。

片岸町●（会社員）男性（40代）

波に飲み込まれ 車に足をはさまれ激痛

勤務先の宮古市向町の路上で津波にのめられました。波に乗って浮き上がったとき、車と車に右足を挟まれ、激痛が。幸い、波に押されて挟まれた右足は解放されたものの、こんどは波に転がされ、黒い海水を飲んだ。足の痛みでなかなか立てず、流れに身を任せ、しばらく仰向けに流されるしかありませんでした。



唐丹町 本郷

痛みを我慢して立ち上がり、路地に入りこみ、そばの病院の2階へ逃げこんで助かりました。

小白浜●（水産加工場）女性（50代）

避難後、自宅に戻ろうとしたが工場長に制止され助かった

地震発生時、私は職場の水産加工場で働いていました。海が目の前なので、とにかく高台に避難しました。

自宅にいる母がとても心配で、車を置いたまま避難したので、何度か車を取りに戻ろうとしましたが、工場長に止められ戻らなかったので、いま生きていられると思っています。

片岸町●（会社員）男性（30代）

あのまま車を走らせていたら、生きていたかどうか

仕事先で地震が発生し、職場の全員で外に飛び出した。その後、解散と

いうことになったので、会社の車で自宅へ向かいました。

海の近くの道路を通るのですが、あんな津波が来るとは思っていなかった。途中で、別に何とも思わなかった。途中で渋滞に巻きこまれ、いつもと様子が違うことに気づき、咄嗟に近くの駐車場に車を置いて、走って反対方向に逃げました。

あのまま進んでいたら生きていたかどうか…考えるだけでも恐ろしいです。

証言 海・沿岸

（漁業関係、沿岸部の会社など）

漁業関係者や海に近い職場の人は危機意識は高かったはずだが…

3.11 証言

大曾根●（ワカメ養殖業）男性（60代）

波が引き始めてもなかなか津波が来ない

私と妻と2人の女工さん4人は、海

から30mの作業所でワカメ作業中でした。14時46分ごろ、突然の地鳴りに始まり、大地震が。

すぐに作業所の外へ出ましたが、65年の生涯の中で経験のない大地震に

「想像もつかない津波がかならず襲ってくる」と感じ、妻と女工たちを車で高台にある避難場所へ走らせました。そして、自分は津波防波堤の所まで避難しました。沖がよく見える所で、海より10m以上高く、ある程度は安心できる所でした。

波が引き始めても、なかなか津波が来ませんでした。しかし、20〜30分後、沖が白波となり津波が来たと思うや否や、自分の作業所は一瞬の間に飲み込まれました。津波の恐ろしさを目の当たりにして身の危険を感じ、さらに20m以上高台の大杉神社へ走って逃げました。

浜町●（港湾労働者）男性（60代）

「何だこりや…」
血の気が引く思いだった

製鉄所桟橋での船の仕事なので、「地震＝津波」は頭には入っていました。あの日も地震後、防潮堤（7ヶ所）の門扉を閉め、潮位の変化を見ていたら引き始めたので、急いで指定避難場所の市営ビル3階に全員で避難しました。海を見ていたら、白く泡立つように見えました。「いつもの津波とはちよつと違う。大きいぞ」と思い、より高い避難道路に全員で避難しました。

その後はテレビの映像を見ているよう



唐丹町 荒川

な光景で、「何だこりゃ」と血の気が引く思いで、事の重大さがひしひしと伝わってきました。

小白浜●（水産加工場）

一次避難は防潮堤へ それが習慣になっていた

海岸付近の水産加工場にいた住民・従業員は、防潮堤に上がり、海の様子を見ていました。一次避難として防潮堤に上ることは、地域で習慣化していました。その後、海の様子を見ながらさらに高台へと避難しました。

箱崎白浜●（ワカメ養殖業） 女性

漁に出る日だったので 地震のあと沿岸の倉庫へ

その日はワカメ漁に行くことになっていたので、揺れが収まってから海沿いの倉庫へ行きました。箱崎白浜の方たちの多くは倉庫にいました。

3mの津波警報を聞きましたが、海の様子が少し上がっている程度だったので、みな、こんなに大きな津波になると思わず、倉庫前の避難道路で海の様子を見ていました。

波が静かに上がってきたとき、近くにいた方に車に乗せてもらって高い

所をめざしましたが、途中、波に巻きこまれて流されてしまいました。

流されている最中、ワカメ漁のロープに足首が引っかかって、どんどん波に引っ張られてしまいました。長靴を脱ぎ捨てることでロープから抜け出すことができました。浮き玉に掴まろうとしたけれど、滑って掴むことができませんでした。運よく引き上げてもらえて、なんとか助かりました。

浜町●（漁業者） 男性（60代）

船を沖出ししたが 無線も飲み物もなく…

最初の地震で津波が来るとは思いましたが、「釜石には防波堤がある」と過信し、船（0.6t）を沖出ししました。結果的には助かりましたが、まさかこれほどの津波が来ようとは思ってもいませんでした。

湾口防波堤は、第二波だと思いましたが、波が覆いかぶさり、見えなくなりました。波がなくなると、震災後の姿になっており、津波の破壊力のすごさに驚きました。また、湾内の潮の流れはとても速く、養殖施設のガレキも流れ、逃げ回るので精一杯でした。無線も飲み物もなく、一晩、仲間の船に曳航してもらい過ぎしました。



只越町

証言「鵜住居地区防災センター」の事例

釜石市鵜住居地区防災センターにおける 東日本大震災津波被災調査報告書

11言
3.11証

東日本大震災では、多くの住民が流され犠牲になった。なかでも被害が大きかったのが、市北部の沿岸部に位置する「釜石市鵜住居地区防災センター」であった。犠牲者は推計160名以上。市は、防災センターに関する被災者遺族の連絡会からの要望により、「釜石市鵜住居地区防災センターにおける東日本大震災津波被災調査委員会」を設置。同委員会から市に「釜石市鵜住居地区防災センターにおける東日本大震災津波被災調査報告書」が提出された。

鵜住居地区防災センターの整備

「釜石市鵜住居地区防災センター」（以下、防災センター）は、町の中心部、鵜住居駅の近くにある。この施設は、消防出張所、行政窓口・保健福祉サービスを行う生活応援センター、公民館、消防団屯所を合築したもので、平成22年2月に開所した。経費は国の防災関係の資金を借り入れることにし、「防災センター」の名称で整備された。

二度と繰り返さないために

この痛ましいできごとを繰り返すことがないよう、市では、原因を調査し、被災者遺族の方々に説明会を開催した。また、検証を行うため、「防災センターに関する被災者遺族の連絡会」の協力を得てセンターの避難者名簿整理作業などを進めた。また、さらに連絡会から第3者有識者委員による検証を行うよう要望が出されたことから、「調査委員会」を設置し、「防災センターにおける東日本大震災津波被害調査報告書」を作成した。その結果、以下の問題点が取りまとめられた。

調査委員会により抽出された問題

点は、「避難者数、被災状況に関する事項」、「防災センターの設置及び機能に関する事項」、「避難場所の住民への周知に関する事項」、「防災センターで実施された避難訓練に関する事項」、「3・11当日」の住民行動、避難誘導、情報伝達に関する事項、「釜石市の津波防災対応に関する事項」、「津波浸水予測図に関する事項」、「気象庁の大津波警報の発表に関する事項」の8点である。

「避難者数の推計」は、連絡会と市により今も続けられている。以下、報告書での指摘事項の抜粋を記す。

「防災センターの設置及び機能に関する事項」においては、『「防災センター」との呼称は津波の際の二次避難場所でもあるとの認識を生み、避難訓練時の使用など誤った運用によって多くの犠牲者を出す要因となった。』と指摘している。

「避難場所の住民への周知に関する事項」においては、『広報紙等によって、鵜住居地区の津波の二次避難場所とは「旧JJA集配センター」「鵜住居神社境内」「本行寺」「常楽寺裏山」と広報されていたが、防災センターが二次避難場所ではないとの周知がされていなかった。地域防災計画に示されている避難場所等の区分も、「津波避難場所」「拠点避難所」「二次避難場所」「避難者収容施設」

等が混在し、正確な理解は住民には困難であった。』と指摘している。

「防災センターで実施された避難訓練に関する事項」においては、防災センター整備後の訓練の過程で、『防災センターに避難した住民の多くは、防災センターが津波の避難場所であると思い込んでいた。』『実質的に防災センターが津波の二次避難場所として機能していたにもかかわらず市が注意喚起をし、以降の避難訓練は本来の避難場所で行うべく指導を行わなかったことが、多くの犠牲者を出す要因となった』と指摘している。

「3・11当日」の住民行動、避難誘導、情報伝達に関する事項においては、『市が防災センターに関わる職員及び町内会・消防団等の住民に対して津波発生時の適切な対応を周知していなかったことが防災センターへの避難誘導に結びつき、多くの犠牲者を出す要因となった。』と指摘している。

「釜石市の津波防災対応に関する事項」においては、『市は、防災センターを「避難訓練のための避難場所」として容認し、危機管理体制の見直しを行わなかった。また、防災センターの職員が警報時の初期段階で適切な判断と行動ができる運営体制の構築には至らなかった。』と指摘している。

「津波浸水予測図に関する事項」に

おいては、『防災センター付近は、(岩手)県が作成した「津波浸水予測図」では、津波防災施設が機能しないという条件下でも浸水域から外れている。シミュレーションはある一定の条件下での目安であり、防災対策上不可欠なものであるが、より大きな津波も襲来し得ることを念頭に置くことが重要である。』『津波浸水予測図の活用の方を十分に理解できている。』と指摘している。

「気象庁の大津波警報の発表に関する事項」においては、『防災センターで被災しながら生存した者は少なく、高さ3mの津波警報が避難行動にどう関わったかを統計的に判断することはできなかった。しかし、『高さ3mであればここまでこない』『高さ10m以上といわれれば対応は変わっていたであろう』という声が少なからずある。気象庁の大きく外れた地震直後の津波警報は、防災センターで多くの犠牲者を出す要因の一つであると推測される。』と指摘している。

調査報告書では、「事態の回避は可能であった」と総括する。「市職員の危機管理意識の向上、危機管理体制の強化、防災施設の見直し、住民意識啓発など、市と住民の連携のもとで、従来とは異なる発想で取り組みを進める必要がある。」としている。

「ここにいれば まず安心」

あの日、夫と買い物をしているとき地震にありました。車に戻りラジオをつけると、津波警報が出ていたので、夫は自宅や漁船の確認のため、すぐに地元に戻りました。

残された私は、その場でウロウロしていましたが、買い物客の大半は地元の人で、いつせいの鶏住居うのすまいの近くの防災センターへ向かいました。私もあとを追いました。

防災センターでは、一緒に避難してきた人たちが、津波襲来の有無を尋ねたり、さしたる緊張感もなく談話していました。防災センターの2階へ上がると、公民館活動のサークルの人たちが数名、雑談をし、大ホールにも十人近い人が避難していました。駐車場にも大勢が集まってきたので、「ここにいればまず安心」と思いました。地震発



被災後の鶏住居地区防災センター・鶏住居町

生から25分ほどのことでした。

4mある天井まで水 修羅場と化した

まもなく、足が濡れているのに気がきました。

「何、これ...」。

津波だと気づいたそのとき、100人以上が2階へ上がつてきました。私は窓辺に移動しました。外を見ると、黒い塊のような津波が、家という家を押し流しながら迫ってきました。一瞬、目が点になりました。

危険を感じ、部屋の中央に

戻ったとき、津波が部屋に入ってきて、あつというまに修羅場と化しました。高さ4m近い2階大ホールが津波でいっぱいになり、みなアップアップの状態でも

がきながら、顔ひとつ分しかない隙間から口を出してなんとか呼吸していました。

壊れた天井の木材、天井スピーカー、カーテンなど、みな必死でしがみつきました。しかし、100人以上いたため、しがみつくものが足りません。天井板をはがそうと手でドンドンたたく人もいましたが、それにもかかわらず、ついに黒い波の中に沈んでいきました。

救助は3日目の夜 低体温症で 亡くなった方も

津波が引いたあとで、重なるように横たわる遺体を目にしました。

その後、津波は繰り返し押し寄せてきましたが、幸い、ホールに隣接する場所に防災備蓄倉庫があったので、そこへ移動し、備蓄してあった毛布をからだに



被災後、施設内に設置されていた献花台

巻き付け、机や整理棚の上に乗って、互いに身を寄せて寒さをしのぎ、救助を待ちました。

夜、寒波がやってきて、窓から雪が吹き込みました。毛布で窓をふさぎましたが、寒さから低体温症になり、命を落とした方もいました。

翌日も、翌々日も、だれも助けにきてくれません。外へ出たいけれど、土砂やガレキでドアが開きません。上空ではヘリコプターや飛行機の音が騒々しいのに...。

泣く力もなくなり、「終わらだな」と死を覚悟した3日目の夜遅く、自衛隊の救助隊が防災センターの屋上に降りてきました。

証言 小学校・中学校 放課後の子どもたち

小・中学生2,926人の生存率は99.8%。
子どもたちは、いかに逃げたのか

3.11 証言

震災当時、釜石市には小学校9校、中学校5校、計14校があり、2,926人の生徒がいたが、多くの生徒たちが素早い避難により津波から逃れることができた。生存率99.8%。実践的な防災教育の積み重ねがあった。では、子どもたちはどのように逃げたのか。釜石東中学校、鵜住居小学校、釜石小学校、3校の事例を紹介する。

釜石東中学校、鵜住居小学校

中学生が率先避難者となり、小学生、地域の大人たちなど総勢600人が高台をめざした

釜石東中学校の率先避難

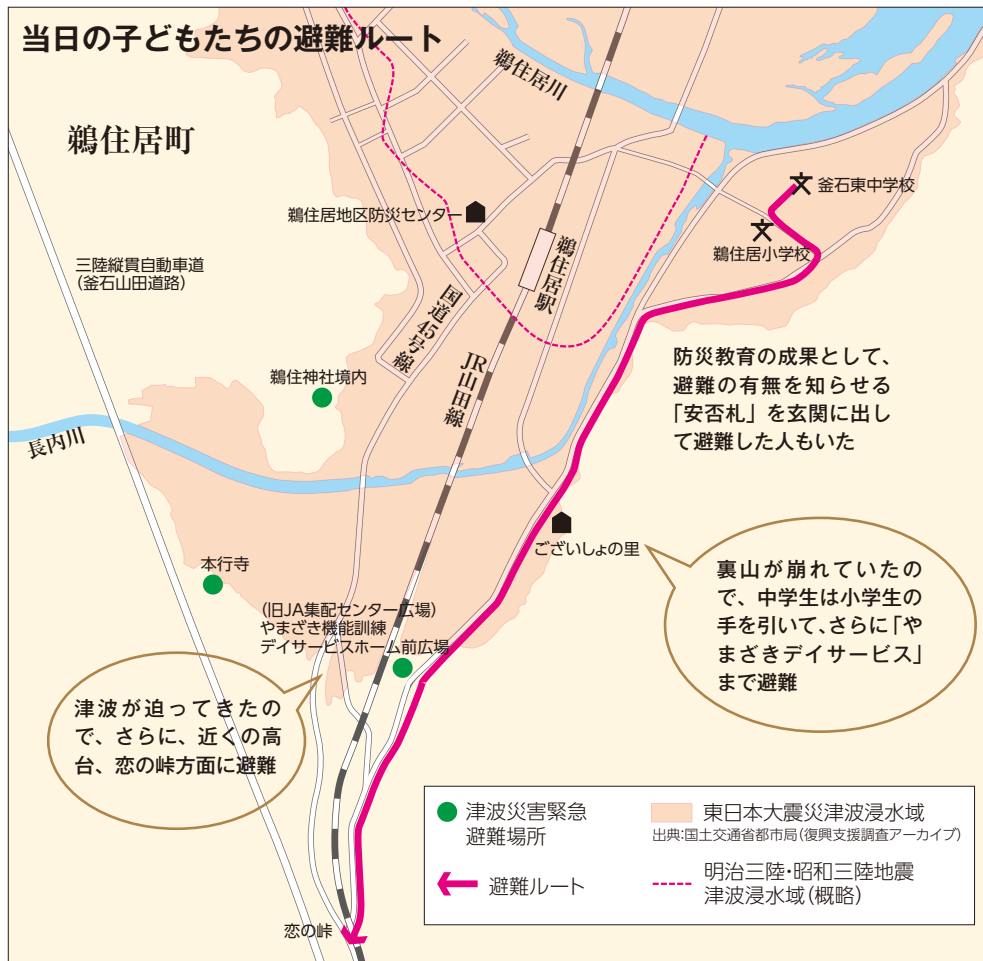
地震が発生したのは「帰りの会」が終わったところだった。

1年生は担任と3階の教室にいて、2年生はすでに部活動の準備で教室を離れていた。3年生は2日後に迫った

卒業式の準備をしたり、帰宅をするところだった。

副校長は、ただならぬ揺れに大津波を予感し、校内放送で避難を呼びかけようとしたが、停電のため校内放送が使えない。生徒たちはすでに校庭に避難を始めていたものの、すでに校庭に

当日の子どもたちの避難ルート



※ございしよの里が避難場所になった経緯: 両校から最寄りの市指定の避難場所は、「旧JA集配センター広場」であったが、同場所の寒さ・トイレ等の問題から両校の避難場所として「ございしよの里」が設定された。

はいくつもの亀裂が入り、水が吹き出し、大津波の前兆が始まっていた。副校長は窓から身を乗り出し、校庭にいる生徒に向かって「走れー! 点呼は取らなくていいから」と叫んだ。同時に、職員室にいた一番若い先生に、率

先避難者になって走るよう指示をし、学校にいた生徒がいっせいに走り始めた。一部の生徒は、学校の指示がなくとも、震災の状況を自分で判断して、避難を開始し、定められた避難場所に直接向かった。

●学校の被害状況

- ・当日、釜石市内の小・中学校において、学校を休んでいた、すでに帰宅し、保護者に引き渡したりした5名が亡くなった。
- ・鵜住居小学校では、保護者の対応で学校に残っていた事務職員1名が被災し、行方不明となっている。



やまざき機能訓練デイサービスホーム前広場（旧 JA 集配センター広場）・鵜住居町 新川原

浦山文男氏提供

「いざいしょの里」へ避難

そのころ、東中学校に隣接する鵜住居うのすまい小学校では、津波の襲来に備え、児童を校舎の3階などに避難させていた。しかし、東中学校の生徒が「津波だ、逃げろー!」と叫びながら小学校の校庭を走りぬけていくのを見た。また、消防団員の指示などにより、児童、教員、中学生とともに走り始めた。

総勢、約600人が、学校から800mほどの距離にある介護施設「いざいしょの里」を目指した。普段、小・中学生たちが一緒に避難訓練で使っていた場所だった（海拔5m）。「いざいしょの里」には、避難したときのための「学級札」を置いていた。先に着いた生徒や教員がこれをかざし、ばらばらに避難してきた生徒たちが整列。素早く全員の無事を確認することができた。

最善を尽くせ、より高台へ避難

安心したのも束の間、「いざいしょの里」の裏の崖が崩れかけているのが発見された。近所の住民からも「ここは危ない」と言われ、300m先の高台（海拔15m）にある介護施設「やまざき機能訓練デイサービスホーム」に

避難することになった。中学生は泣きじゃくる小学生の手を引き、声を掛けて励ましながら避難した。小・中学生が避難するのを見て、近隣の大人たちも避難の列に加わった。

「いざいしょの里」は、生徒たちが離れた約5分後に水没した。

やっとの思いで「やまざきデイサービス」に逃げ込むが、列のうしろにいた生徒が振り返ると、津波が鵜住居の町を飲み込んでいく様子が見えた。だれもが「まもなく、ここまで津波が来る」と感じた。教員たちは「死ぬぞ! 走れ!」と叫び、全員でさらに高台を目指した。途中の急な坂道で、生徒たちは幼い子どもをおんぶしながら、ともに坂を上った。

最終的に恋の峠まで避難し、ぎりぎりのところで全員、助かることができた。



安否札

鵜住居小学校 男子児童（10代）

ここで本当に大丈夫かなあ…

ぼくたちは、いままでたくさん避難訓練をしてきました。でも、あの地震のあとは、どうしたらよいかまったく分からず、ただ必死で逃げました。最初に逃げたのは「ございしよの里」ですが、ぼくはまだ安心できませんでした。「ここで本当に大丈夫かなあ」とずっと思っていました。上にある老人ホームに行つて「ここなら安心だなあ」と思えても、もう津波はその下まで来ていました。みなパニックになつて、上へ上へとよじのぼつて行きました。

鵜住居小学校 女子児童（10代）

とつても×
10000倍
怖かった

「やまざきデイサービス」で山の近くから煙が見えたとき、みなで「火事?」「山崩れ?」と話をしていました。ザブンと大きな音が聞こえ、「何?」と思つて立ったら、黒い波が見えまし

た。先生方が「津波だ!」と

大きな声で叫んだので、みな逃げました。転んだり、怖くて泣いていた人たちも一生懸命逃げて、みな無事でした。とつても×10000倍怖かったです。

釜石東中学校 女子生徒（10代）

死にたくない
逃げなきや

「やまざきデイサービス」で、津波が町を襲い、たくさんものや人を飲みこむ様子を見たとき、「ここで死ぬのかもしれない」とも考えてしまいました。でもすぐに「死にたくない、逃げなきや」と思い、気がついたら高い所を目指し走っていました。

鵜住居町●女性（60代）

中学生は冷静で
頼もしかった

避難先で、白い津波のしぶきを目にして少しパニックになりましたが、そばにいた東中学生が私のリュックを持ってくれて、一緒に恋の峠まで逃げてくれました。訓練をしていたためか、とても冷静に行動していましたの

で、とても心強かったです。

鵜住居町●女性（60代）

泣いて動けない
生徒の肩を抱いて

鵜小と東中生が、「やまざきデイサービス」前で「点呼」を取り始めた時、山田線沿いに津波が来ていっせいに恋の峠に向かつて逃げました。私はその時、一人線路上で泣いて動けなくなっている中学生の女子生徒の肩を抱き、「大丈夫だから」と声をかけながら歩いていきました。



『ございしよの里』から手を取り合つて避難する児童・生徒・鵜住居町 新川原高村幸男氏撮影

保育園

近隣住民や会社員の助け舟で スムーズに避難できた保育園の園児たち

震災当日、釜石保育園には園児 75 人、職員 19 人がいました。園児たちはお昼寝中だったので、職員に起こされ、0～2歳時は散歩車に乗り、3～5歳児は靴を履きジャンパーを着て、園庭で待機。職員は、1人で4人の園児をみななければならないため、思案していましたが、幸い、近隣の住民や事務所の人たちなど、多くの助け舟がありました。子供を抱っこし、手を引き、あるいは散歩車を押し、無事に指定避難所の「薬師公園」の中腹にある観音寺に行くことができました。園児たちは泣かずに避難しました。

しかし、余震が続いたため、職員たちはさらに頂上に向けて移動しました。その間、釜石市街地に津波が到達。職員は子どもたちの目に入らないように移動させました。

頂上に到着すると、数人の保護者や地域の人もかけつけ、子どもたちの安全を確認して待機。寒さが厳しい

ため、公園に隣接する「のぞみ病院」に移動しました。

しかし、のぞみ病院は被災後、非常用電源が稼働せず、給食施設も壊れていたため、園児たちは、暗闇のなか、懐中電灯のあかりだけを頼りに、菓子類など少ない食糧と数枚の毛布のみで一夜を明かしました。

●子ども関連施設の被害状況

釜石市（市保健福祉部地域福祉課）が所管する子ども関連施設は、保育園 8 施設、子育て支援センター 3 施設、児童館 5 施設、学童育成クラブ 10 施設があった。施設で管理する園児・児童のうち、施設管理下での犠牲者はなかった。

ただし、保育園等を休んでいたりと、発災後、保護者に引き渡したなどにより、4名の保育園児が犠牲になった。

釜石小学校

学年末の短縮授業で子どもたちはすでに下校していたが
自分の判断で自らの命を守った

安否確認に奔走した 教職員

あの日、学年末の短縮授業で、学校にいた子どもは10人のみ。ほとんどの子どもたちは午後1時に下校していた。しかも、多くの子どもたちの家は、津波浸水域にある。海岸に釣りに行っていた子どももいた。

長い揺れのあと、防災無線放送のサイレンが鳴り始めた。校長は職員に避難所の準備をするよう指示した。マッポを運ぶ先生、ストーブを運ぶ先生、表示を書く先生…。みなが機敏に動いた。

午後3時半前後、津波襲来。大渡川のほうから滝が溢れるように水が流れてきた。車がどんどん流されてきた。坂の下が渦巻く。不気味な黒い波、涙する人々…。

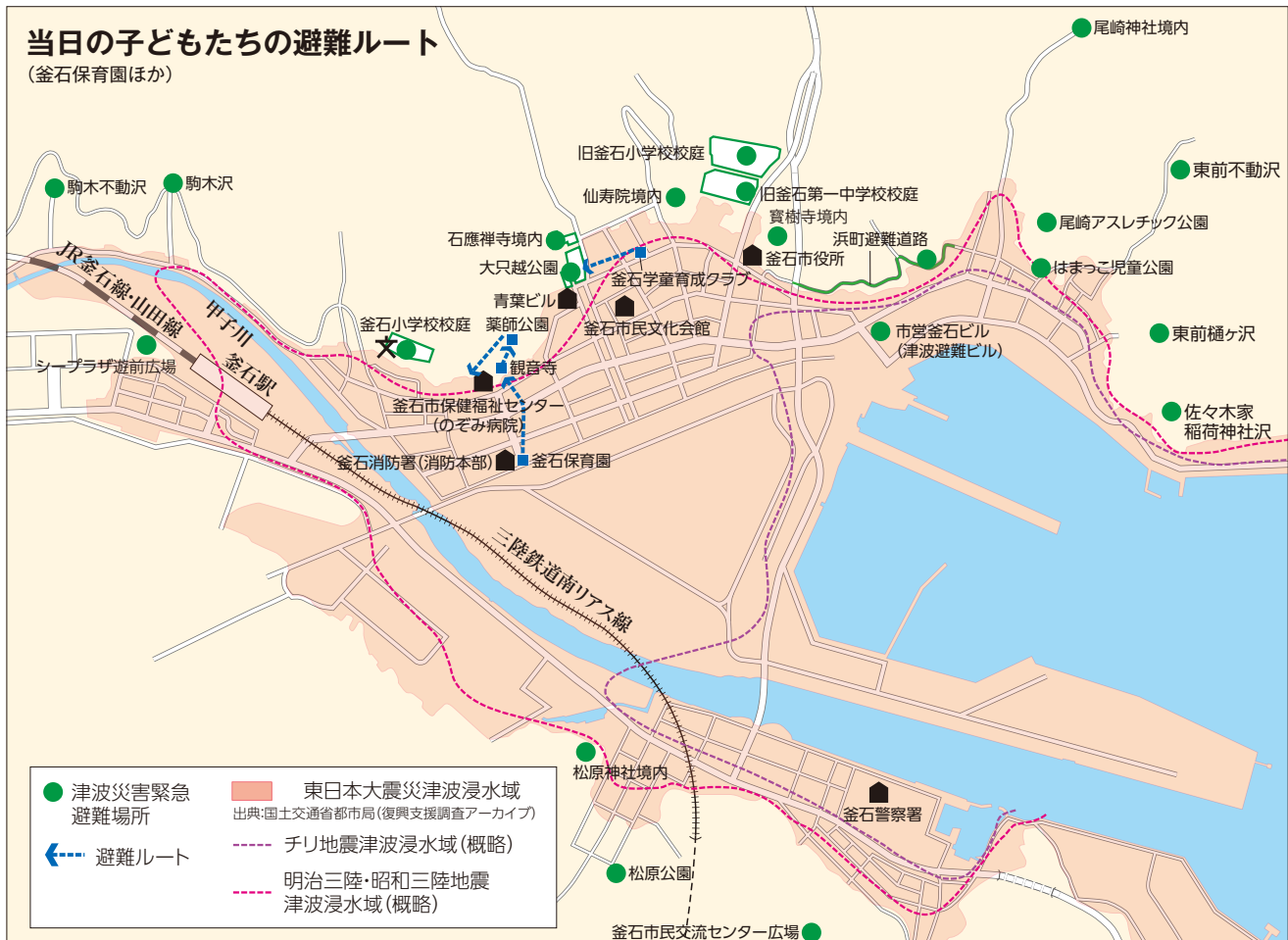
校長はあぜんとなるが、なんとか気

を取り直し、避難者を教室内に誘導した。つぎからつぎへと避難者が来て、教室も保健室も、あつという間にいっぱいになった。

その避難者から「郵便局のあたりで、釜小ジャージを着た女の子が3〜4人、流されたようだ」といった噂もたらされた。子どもの安否を思い、全職員が眠れぬ夜を過ごした。

翌日、学校の下はガレキだらけ。「地獄」といってもいい状況だったが、職員は子どもたちの安否確認に出かけることにした。いろいろな情報がとびかっていたため、必ず児童の顔を確認することとした。職員はガレキを越え、あらゆる避難所を探して歩いた。学区外にも出かけた。

そして2日後、午後3時2分。最後の1人の子どもの確認がとれた。釜石小学校184人、全員の無事確認。職員室で拍手が沸き上がった。



※震災後、市営釜石ビル(津波避難ビル)は指定解除されています。(平成28年3月現在)



避難訓練・釜石東中学校

自分で命を守った子どもたち

(津浪を語る会・文集より)

放心状態の祖母と幼い弟を連れて

当時4年生だったA君は、6歳の弟と祖母の3人で、只越町の自宅にいました。

A君は、普段は大人の判断を待つて行動するのですが、強い揺れから大津波が来ると考えたA君は、急いで弟にジャンパーを着せ、自分もジャンパーを着ました。そして放心状態の祖母に「おばあ、行くよ」と言い、一番近くの高台の避難道路へ逃しました。

まもなく津波が押し寄せ、海岸から100mの自宅は流されましたが、家族はみな、無事でした。

自宅に1人。母の帰りを待つべきか迷うが

当時3年生のB君は、1人で自宅にいたとき地震にあいました。寝室に行つて布団をひっぱり出し、頭からかぶつて揺れが収まるのを待ちました。揺れが収まると、B君はお母さんの帰りを待つべきか迷いました。3

人兄弟の末っ子で、お母さんが大好きな甘えっこだったのです。しかし学校で「自分の身は自分で守れ」「お父さんやお母さんのことは考えないで、まず、自分1人でも生き延びろ」と学んでいたので、1人で近くの避難場所に走つて逃げました。

避難道路か自宅の屋上か

C君(当時6年生)とD君(当時2年生)の兄弟は、海岸から100mにも満たない自宅にいました。揺れが収まったのち、ゲームやおもちゃをカバンに詰めて逃げる準備をしていたため、避難が遅れ、逃げようとしたときには、すでに自宅前の道路に津波が来ていました。

避難道路は自宅から歩いて2〜3分ですが、C君は学校の防災学習で「50cmでも流される」と学んでいたもので、あえて避難道路ではなく、鉄筋コンクリートの自宅3階の屋上に逃げました。津波は2人いる3階まで押し寄せ(13m超)、兄弟の足を濡らしましたが、まもなく収束し、2人は助かることがで

避難を拒む祖母を何度か説得

E君(当時4年生)は、只越町の祖母の家に遊びに来ていました。祖母は強い揺れにもかかわらず「津波が来ても大したことではない。2階に逃げればいい」と言つて、避難しようとしませんでした。E君は「お願いだから、逃げて」と必死に説得しました。何度も説得して、祖母はようやく「じゃあ、逃げっぺし」と応じてくれました。

E君は祖母の手を引きながら、どこへ避難するか考えました。釜石小学校は海抜が高くて安心ですが、目の悪い祖母と一緒にでは時間がかかります。E君は、近くにある寺に祖母を連れていきました。無事に避難場所に着いた直後に、祖母の家は流されました。

足に障がいのある子と仲間がおぶつて避難

当時6年生のF君は、仲間と広場で遊んでいました。大きな揺れに「やべえ、津波が来るか



防災授業・釜石小学校

も」と、400m先の避難場所を目指して走りました。しかし、生まれつき右足に障がいがあつて義足をつけているF君は、みながら遅れ始めました。

F君の遅れに気づいた仲間の1人が「おぶつていくよ」と言いました。F君は「いいよ」と断りました。自分のために仲間の避難が遅れることを心配したのです。しかし、再度仲間に促され「じゃ、よろしく」と言つておんぶされ、無事に避難することができました。

F君は「いま思えば自分でも恥ずかしいですけど、そういうことをしてくれる友だちがいて、本当によかったなあと思う」と語っています。

3.11-17

市災害対策本部の7日間

災害対応の拠点となる 市庁舎が被災。 一時的に レスキュー機能が喪失。

あの日、釜石市役所第一庁舎では、
市議会定例会が開かれていた。
長く大きな揺れに続き、職員や議員が持つ携帯の
緊急地震速報が、いっせいに鳴った。

混乱きわまるなか、
どう命をつないだのか

平成23年3月11日14時46分。釜石市役所第1庁舎

では、平成23年3月釜石市議会定例会が開催されていた。長く大きな揺れに少し遅れて、職員や議員などが持っている携帯電話の緊急地震速報がいつせいに鳴った。

第1庁舎は昭和29年に建設されたため倒壊の恐れがあり、ほとんどの職員は二度外へ、あるいは一部は屋上に避難した。

地震の揺れにより、市庁舎（第1庁舎・第5庁舎）の設備は一部損壊し、第1庁舎はガラスが割れるなどの被害を受けたが、建物の倒壊は免れた。

最初の揺れが収束すると、防災課では、マニュアルどおりに防災行政無線放送のほか、広報車により、また消防本部も消防車両にて、避難の呼びかけを行うとともに、他の職員とともに被害状況の把握に努めていた。津波が来る直前までは、テレビを見ることができ、電話も通話できる状態だった。

14時51分ごろ、テレビで大津波警報が発表されたことを確認。14時56分、警察からの電話により「国道45号が全面通行止め」といった情報を入手した。

報道機関から問い合わせの電話も入っていたが、そのうち周囲から「津波が来たぞー」という声が聞こえたため、即座に「みな、屋上へ行けー」と叫び、外にいた職員もみな、庁舎内に退避した。

地震の倒壊を恐れて第1庁舎の外に避難していた職員は、津波が来るという声を聞き、ふたたび第1庁舎に戻ったところ、まもなく波とともに家がガレキと化して押し寄せた。

● 防災直後

市役所庁舎

おもな庁舎（第1～4）は浸水
電源・通信手段が喪失した。

道路がガレキで寸断され、
行動範囲が制限された。

釜 石湾岸から近いところに位置する釜石市役所は、津波により、第1庁舎の地階、第2庁舎、第4庁舎の1階などがそれぞれ浸水した。

運営班（防災課）を中心とした「市災害対策本部」は、被害状況などの情報収集を試みたが、地震発生後まもなく、市内全域が停電し、第1庁舎の地階の機器室が浸水したため、庁内ネットワーク、対外インターネット接続などが切断されるなど、情報通信網が途絶した。地区に通じていたのは小佐野地区生活応援センターとの防災行政無線のみだった。

さらに市第1庁舎、第4庁舎付近は、流れ着いたがれきが山積したため人の往来が困難となり、事実上、孤立した。被害状況、避難所の開設状況も分からない状況のなかで、市地域防災計画に定めている組織で遂行できる業務は限られ、個々の職員が、救助や傷病者の病院への搬送、孤立地区の確認と移送、食料の運搬、道路啓開、避難者の対応・避難所開設など、目の前の事態に対応した。

消防署や警察署も被災していた。

釜石大槌地区行政事務組合消防本部・消防署は、内陸部に位置する小佐野出張所を残し、釜石、大槌の消防署、鶴住居出張所の庁舎が被災し、使用不能になった。消防車両18台と、多くの資材・機材が流出した。

消防本部・消防署・消防団

内陸部の出張所を残し、庁舎が被災。

消防車両18台（釜石消防署9台、釜石市消防団9台）
資材・機材が流される。

警察署

2階まで津波に襲われ、水没した。

3.11-13

情報発信、避難所支援、安否確認、食料確保、道路復旧、遺体安置など職員は現在の業務に追われた

3.11

市災害対策本部を設置

14時46分、マグニチュード9.0の地震発生。相当規模の被害が想定されたため、地震発生と同時に「市災害対策本部」を設置した。

津波の襲来により、市庁舎内には多数の避難者が避難してきたことから、すべての会議室を開放。このため「市災害対策本部」は市長室に設置した。

避難の呼び掛け 避難指示の伝達

14時49分、大津波警報が発表された。沿岸地域の一刻も早い避難が必要とされたことから同時刻に

「市災害対策本部」は、沿岸地域6,354世帯、14,710人に対し、避難指示を発令し、防災行政無線を放送した（14時50分から15時38分の間に合計17回放送）。広報車などによる避難の呼び掛けも行った。

被災状況、避難所状況等の 情報収集

津波到達後に電源が喪失したため、通信手段は、当日、訓練のため偶然居あわせた自衛隊の無線、屋外用の衛星携帯電話（震災当初2台所有）、移動系の防災行政無線のみだった。電話などの早期回復は不可能な状況下において、早急な被害状況の情報収集が求められた。

そのため、移動系の防災行政無線により、小佐野地区生活応援センターをはじめとする外部と連絡を取り、可能な限りの情報収集に努めた。また、通信機器等での連絡がつかない場所には、安全を確



避難する高齢者・天神町

保したうえで、市職員を連絡員として向かわせ、市役所周辺の被害状況、避難状況、道路の状況等の情報収集を行った。断片的な情報しか得られないなか、「市災害対策本部」は、その時点で可能な対応を即断し、指示せざるを得ない状況にあった。

自衛隊への災害派遣要請

「市災害対策本部」は、通信手段も限られ、被害の全容をただちに把握することはできなかったが、周囲の状況から大規模な救助活動の必要性を認識していた。

震災当日の19時すぎ、防災行政無線（移動系）を車載した公用車で、県内陸部の出張用務から帰路途中の職員が「市災害対策本部」の無線指示により県沿岸広域振興局に立ち寄り、県を通して自衛隊の災害派遣要請を行った。また、これに先立ち、県では、被災地との通信が途絶するなど甚大な被害が生じていることから、14時52分に自衛隊に災害派遣を要請した。

各地域で避難所が 自主的に開設

大規模な災害であったため、す

べての避難所にただちに職員を配置できる状況にはなかったが、各地域では町内会などの自主的な活動により、指定避難所以外の施設にも避難所が開設された。1万人（推計）を超える避難者が発生したため、救援物資が届くまでの当面の食料を確保する必要があった。

市内の小売店や近隣市町村から食料を確保するほか、あわせて、小佐野地区生活応援センター経由で炊き出しの対応要請を行った。

被災を免れた地域の町内会等では、近隣のスーパーなどから米をはじめ食料を調達し、炊き出しを行い、順次、避難所等に配送した。

避難所の開設、運営については、震災前から生活応援センターや地域会議の活動を通して、地域住民と行政が協働で活動する機会が多かったこともあり、地域の積極的な支援が得られ、避難所運営に係る連携協力が図られた。

なお、多くの避難所は停電により情報が不足していたが、なかには、支援により新聞などが配布された避難所もあった。テレビの設置は、各避難所で自主的に調達するなど対応していた。市としては、13日におもな避難所に設置することとし、18日以降、順次配備を進めた。

防災行政無線 による 避難指示



防災無線を聞いてつぎつぎに避難場所に集まる。不安そうな表情 旧釜石第一中学校校庭・天神町



旧釜石小学校校庭・天神町



階段の下まで浸水した
仙寿院・大只越町



只越町

14:50 〈気象庁〉

気象庁が津波情報（津波到達予想時刻・予想される津波の高さに関する情報）を発表。岩手県で予想される津波の高さを「3m」とした。

14:50～15:17

気象庁発表に基づき「3m以上」として、15時17分まで合計8回、つぎの放送をした。

「ただ今、岩手県沿岸に大津波警報が発表されました。高いところで3m以上の津波が予想されます。火の始末をし、海岸付近の方は近くの高台か避難場所に避難するよう指示します」

15:14 〈気象庁〉

気象庁は津波情報を更新。岩手県で予想される津波の高さを「6m」とした。

15:21

釜石港に設置された海上保安庁の験潮所で、4.2m以上の津波を観測しているが、通信回線の切断により「市災害対策本部」では確認できなかった（その後、津波により験潮所の観測機器が破壊されたため観測が不能となる）。

15:22～15:38

「市災害対策本部」は、気象庁の予想を上まわる津波が来るものと判断し、15時22分から15時38分に放送した9回については、津波の予想の高さを入れずに、もっぱら住民避難を指示することをより明確にした内容に切り替え、放送した。
「ただいま、岩手県沿岸に大津波警報が発表されております。海岸付近の方は、近くの高台か避難場所に避難するよう指示します」

15:31（放送途中）

気象庁は津波の予想高さを「10m以上」としたが、そのときには当市沿岸部の一部では10m以上の津波（遡上高^{そじょうこう}）がすでに到達していたと思われる。

※釜石沖にGPS波浪計が設置されていたが、通信回線の切断により、海上保安庁の験潮所データ同様、「市災害対策本部」では観測データを確認できなかった。

市役所での避難者の受入れ 安否確認伝言板の設置

震災直後、2000人を超える住民が高台にある市役所（第1庁舎）へ避難して来たため、議場、会議室などに、避難者を受け入れた。

しかし被災後、市庁舎周辺はガレキに囲まれ孤立したため、職員は避難者の食料確保のため、浸水した地下売店から飲食可能な品を調達した。ただし、停電により電気もなく、トイレも使用できない状況だった。避難した中国人研修生からは、市長に対して直接窮状を訴える場面もあった。一方、「市災害対策本部」が置かれた2階には安否確認伝言板を設置し、確

認された安否情報を提供した。

防災行政無線による 市長メッセージ

甚大な被害により避難者の数も把握できず、孤立している地域もあり、市民への速やかな情報提供が求められていた。

19時、防災行政無線を活用し、市長のメッセージを発信した。市内各地で大きな被害があり、多くの方が犠牲になっている状況を市民に伝えるとともに、被災を免れた地域の住民に対しては、食料の提供を要請する内容の放送を行った。

市長のメッセージにより、それ



金石漁港・新浜町



金石漁港・新浜町



金石海員会館付近・魚河岸



市街地を襲う津波 浜町避難道路・浜町

それぞれの地区で、避難住民に対する自主的な支援活動が行われた。

市役所周辺の避難所を訪問 避難者を激励

震災当日、浸水地域の住民は、最寄りの施設に身を寄せていたが、被災状況などの情報も少なく、支援が行き届かないなか、避難者の不安解消を図る必要があった。市長は、市役所周辺の避難所（徒歩で移動可能な場所）を訪問した。現段階での情報提供のほか、避難者への激励などを行った。

市内西部地区との 通行可能な連絡道路を確認

一刻も早い救援活動の実施、受け入れのため、被災地区と市内西部地区を結ぶ連絡道路の早急な確保が必要であった。

市内西部地区との連絡道路について、どこかの復旧（けいかい）を優先させるべきか協議した。

現地調査（12日の2時）の結果、駒木町の道路（市道中妻駒木線）が通行可能であることを確認した。また、同時刻には、県沿岸広域振興局長が「市災害対策本部」を訪問し、今後の災害対応について、



釜石港内を漂流する大型貨物船 浜町避難道路・浜町

て、市、県、自衛隊等関係機関で協議する場を設置することを確認した。

道路復旧は、12日より岩手県建設業協会釜石支部を核とした協会連盟各社が連携し、実施した。同支部には市職員が常駐し、「市災害対策本部」との連携を徹底する体制を整えた。



中番庫方面から黒煙があがり、市街地に爆発音が響く 大町

3.12

自衛隊等による救助の開始

早朝から、自衛隊、緊急消防援助隊、警察広域緊急援助隊などが順次到着し、救助・搜索活動が開始された。



自衛隊による救助活動・大町

3時20分、県などからの災害派遣要請により釜石地域を担当することとなった陸上自衛隊秋田駐屯地の第21普通科連隊が当市に到着。市と救助活動に係る搜索範囲、方法、支援拠点の設置場所等について調整を行った。

「市災害対策本部」では、各隊との連絡調整のほか、受け入れ体制を整備し、連携して救助活動などの対応にあたった。

4時30分、同隊の先遣中隊本部は、被災市街地に進出し、生存者の救出・搜索活動を開始した。

この日以降順次、国際緊急援助隊や各自治体からの応援職員も到着し、被災者支援活動が展開された。



仙寿院・大只越町



旧釜石第一中学校校庭・天神町

避難者の西部（内陸）地区への移送と避難所開設

旧釜石第一中学校体育館など、中心市街地に設けられた避難所の避難者が、収容可能人数を大幅に超過していたため、避難者の生活環境の悪化が懸念された。

このため、西部地区へ移送することとし、西部地区に避難所設置を指示した。

西部地区の各所において、生活応援センターや町内会が主体となり、順次避難所が開設された。市職員や全国からの自治体応援職員を配置し、炊き出し、物資輸送などの支援体制を構築した。また、あわせて避難所移動に要するバスを手配した。

遺体安置所の設置

被災した各所で多数の遺体が見られ、市内公共施設や寺院などに仮安置されていたことから、早急な遺体安置所の設置が必要となっていた。

「市災害対策本部」は、旧釜石第二中学校体育館等を遺体安置所とした。併せて職員を配置し対応にあたらせた。

救助活動が本格化したことに伴

い、遺体の収容者数が増加したため、遺体安置所は、最大4か所設置され、身元確認のほか遺族および埋火葬の対応を行った。身元確認については、警察、医師会および歯科医師会の協力により検視検査が行われ、DNA鑑定や歯科カルテの照合により進んだ。

※遺体安置所は、平成24年3月31日までに順次閉鎖された。4月15日には、身元不明の遺骨管理を釜石市仏教会に委ねた。

大槌町で発生した山林火災の延焼対応

震災時に大槌町で発生した山林火災が12日、室浜、片岸地区に延焼した。

しかし、断水で消防水利が確保できず、消防資機材も流失し、消火活動が困難であったため、消防本部を中心に、緊急消防援助隊や県、自衛隊と連携して対応した。13日から、消防本部、消防団で消火活動を開始した。

緊急消防援助隊（大阪隊）や自衛隊へ、防災ヘリなどの協力を得て消火活動が行われ、火災は20日に鎮圧された。

室浜地区等の住民に対しては、避難用のバスを確保し、移送を開始した。

3.13

救援物資の受け入れ先を シープラザ遊に集約

震災直後、救援物資は、市教育センター、旧釜石第一中学校体育館のほか、各避難所に直接、届けられていたため、「市災害対策本部」では状況を十分に把握できなかった。また各避難所では、物資供給量に格差が生じていたほか、救援物資が急増したことで、市教育センターでの受け入れがスペース的に困難となった。

このため、救援物資の受け入れ先を市教育センターからシープラザ遊へ変更し、一元管理するための物資供給担当職員を配置した。救援物資の受け入れが一カ所に集約されたことで、効率化が図られた。また、市内87カ所の避難所への輸送は、自衛隊などに依頼して、物資輸送手段が確保された。その後、宅配便事業者の協力を得て、物資の整理や避難所への配送

が行われるようになった。救援物資の増加に伴い、保管場所として、シープラザ釜石地下駐車場、旧小川小学校、釜石製鉄所構内倉庫、公共埠頭大型テントが利用された。



釜石市役所第3庁舎・只越町



自衛隊による避難所への物資配送 シープラザ釜石地下駐車場・鈴子町



釜石市役所第4庁舎前・天神町

ライフラインの復旧が始まる一方、避難所や生活支援など、新たな問題が数多く発生した。

3.14

孤立地域のヘリ輸送を実施

13日、14日は、自衛隊により^{うのすまい}鵜住居地区の孤立場所において、住民のヘリ輸送が実施された。

市災害対策本部を

シープラザ釜石に移転

震災により、「市災害対策本部」が設置された市役所第1庁舎の電源・通信も含めたライフラインの早期復旧の見通しがたたなかったことに加え、周囲がガレキに囲まれて孤立していた。

12日、シープラザ釜石への移転を決定し14日に移転した。



釜石商工会議所前・只越町

被災地外に移転したことで、通信手段などが確保され、市内外に情報発信することが可能となり、安否確認などに大きな役割を果たした。

また、自衛隊・県沿岸広域振興局・消防本部・警察・海上保安部等関係機関との連携が円滑に進むようになり、「市災害対策本部」として本格的な業務対応が可能となった。

安否確認所を設置

安否情報の収集・提供については、震災直後、市役所第1庁舎2階で行っていたものの、手狭なため混乱していた。市庁舎自体がガレキに囲まれ孤立しており、市民はガレキを越えて来庁している状態にあり、住民の安否確認の情報集約も困難な状況が続いていた。

「市災害対策本部」の移転に併せて、シープラザ釜石1階に、安否確認（生存、死亡、行方不明、避難所避難者、避難先など）の情報を確認する場として、安否情報掲示板を設置し、避難所の避難者情報（避難者名簿）や、死亡者情報等を掲示するコーナーを設けた。

市が把握している情報のほか、市民からの情報も併せて掲示する

とともに、相談窓口職員を配置し、対応にあたった。

数日後には避難者名簿の集約が行われ、パソコンでの検索が可能となる一方、情報を求める市民が殺到し、情報が得られずさまざまな思いが混濁していたため、職員の対応は困難を極めた。

また、安否情報の提供については、個人情報に配慮する場合があった。

関係機関と連携を強化

災害が大規模にわたり、復旧を要する事業が多分野に及んでいることから、国や県、民間企業との情報共有や支援、協力が必要不可欠であった。

14日、県沿岸広域振興局が中心となり、市、自衛隊、警察、海上保安部、緊急消防援助隊、消防本部のほか、電気・ガス・水道などのライフライン関係機関により構成された「災害対策調整会議」を開催した。

「市災害対策本部」は、救出活動やガレキ撤去、インフラ復旧などの情報共有を図り、市と県が相互に連携し、同会議で対応を調査した。そのため、市の連絡員2人を

県沿岸広域振興局に常駐させた。

また、釜石港湾事務所から衛星携帯電話等の提供を受け、「市災害対策本部」と国土交通省との情報連絡体制を確保した。

同省からは、災害対策現地情報連絡員（リエゾン）が派遣され、国、県など関係機関との連絡調整のほか、災害対応全般で支援・協力が得られた。

市災害対策本部情報の発行

被災直後から電源が喪失し、テレビや新聞などから被害情報を得ることができなかつたため、被災者および在宅被災者の中には、市の災害対応への不満を持つ方が出ていた。このため、3月14日、市災害対策本部情報の第1号を発行した。

当初は、各避難所への情報の周知がおもな役割であったが、市民の要望を受け、同21日には、市内全戸配布とした（配布作業は行政連絡員が行う）。これにより、市民への行政情報等の周知が図られた。※4月11日、「かまいし災害エフエム」が開局された。

そのほかにも、市からのお知らせ、防災、生活情報を伝えるため、6月11日以降は、震災で休刊となつ

た地元新聞社記者の方々が中心となり、市の広報の一環として「復興釜石新聞」が創刊された。週2回無料で全戸配布されることとなり、引き続き市民への情報提供が行われた。8月10日、広報「かまいし」の発行が再開した。

医療活動の展開、 救護所の設置

各地に避難所が設置されたが、震災により各被災地域の道路、通信が寸断され、どのような医療需要があるのか把握することが困難であった。また、全国から、日赤をはじめとする多数の災害派遣医療チームが到着したが、各チームの情報共有が十分ではなく、その活動が重複する場合があった。

そのため、「市災害対策本部」は、災害派遣医療チーム（DMAT）や釜石医師会などに支援を要請した。

14日以降、災害派遣医療チームや自衛隊、



釜石駅前・鈴子町



只越町

日赤などが各地に救護所を設置し、傷病者の治療にあたつた。また避難所の巡回診療も開始し、避難者の治療などを実施した。

災害の特性から怪我などの急性期医療の需要は比較的少なく、避難所などで時間の経過とともに、持病などにより体調を崩す慢性期医療の需要が多かつた。

また、「市災害対策本部」も三師会（医師会、歯科医師会、薬剤師会）と連携しながら、各災害派遣医療チームの活動状況を取りまとめ、その情報共有に努めた。

救護所、避難所、在宅避難者への診療、健康相談、服薬指導、運動指導などを実施した。

災害支援ボランティアセンターを開設

震災直後より、災害ボランティアの申し出が数多くあつたが、「市災害対策本部」では、震災対応業務が増加するなかで、受け入れ体制が整っていなかった。

ボランティア受け入れに精

通した市社会福祉協議会に、ボランティアセンター設置の協力を要請した。14日、同福祉協議会は、市郷土資料館にボランティアセンターを開設した。支援物資の積み卸し、整理、避難所への配送のほか、遺体安置所、り災証明書窓口対応、災害義援金窓口対応、消毒活動等のボランティア受け入れ調整を行った。

通行許可証の発行

震災直後の被災地域は、警察、自衛隊等の緊急車両を除き、車両は通行止めとなつていたが、復旧作業を進めるにあたり、被災地域内の交通状況を踏まえながら通行を規制する必要があつた。

このことから、シープラザ釜石において、緊急車両等に対し通行許可証を発行した。被災地域内の活動車両を公用の業務に従事する車両に限定したことで、渋滞等を抑止し、復旧事業が円滑に進められた。



釜石製鐵所東門付近
(三の橋)

3.15

ガソリン供給を調整 公用車等に給油許可書を発行

被災地域は、警察、自衛隊などの緊急車両を除き、車両通行止めとしていた。一方、震災によりガソリンなど燃料供給の流通が混乱し、スタンド周辺では給油待ちの渋滞が発生。給油対応に対する不満から暴力行為などトラブルも起きていた。

災害対応の緊急車両用の燃料を確保する必要があったため、ガソリン供給の調整を行った。緊急を要する車両に対して、給油券（給油許可書）の配布を開始した。民間給油所と協議し、供給方法を検討した。また、防災行政無線を活用し、給油情報などの生活情報を

提供した。給油の実施にあたっては、職員を派遣したほか、警察にパトロールを要請するなどの対応を行った。（*1）

災害時要配慮者（災害時要援護者）の受け入れ 福祉避難所の設置

避難所生活の長期化に伴い、通常の避難所生活を送ることができない介護が必要な高齢者や障がい者などに対して、避難支援が必要となったため、災害時要配慮者の調査を行い、「福祉避難所（介護付き避難所）」を設置をした。（*2）

4月1日、市老人福祉センター「滝の家」を福祉避難所とし、市社会福祉協議会と居宅介護支援事業所さくらに運営を委託した。4月3日には、清風園を追加し、愛恵会に運営を委託した。

福祉避難所の委託に先立ち、両者は、同所で自主的に介護付き避難所を運営していた。また18日、直接の被害を免れた市西部地区（内陸部）のケアマネージャー協議会および居宅介護支援事業所が中心となり、「福祉機関緊急合同会議」を自主的に開催。介護を要する高齢者等の受け入れなどについて各事業所の役割分担および情報共有を行った。

※1：3月21日以降、正確な情報提供の必要性から防災行政無線により給油情報の提供を開始した（同放送は、ガソリンが通常販売となる4月1日まで継続された。）

※2：23日、避難所に避難している災害時要配慮者の実態把握調査で、移動希望等の聞き取り調査を実施し、個別の状況に応じた避難所を検討した。



救援物資の受け入れ
シープラザ遊・鈴子町



3.15 14:20

大槌町から迫る山林火災の消防活動を行う自衛隊ヘリと消防車両 大浜渡橋付近・片岸町



3.15 14:43
うのすまい
鶴住居町新田



3.15 19:36
市災害対策本部 シーブラザ金石・鈴子町



安否確認所 シーブラザ金石・鈴子町

市の火葬能力を超えた遺体への対応

～土葬準備と市外の火葬協力～

震災犠牲者の数は日を追うごとに増え、遺体安置所はすぐにいっぱいになった。火葬が追いつかない状況だった。

市内の火葬場である「金石斎場」が、停電のため使用できなくなっていた。自家発電機により一時的に復帰したものの、ファンベルトが切れて修理に2日間を要した。加えて燃料不足の問題もあり、火葬場の処理能力を十分に発揮できない状況に置かれた。近隣の市町村と「火葬の協力」についての取り決めも、当時はまだ行われていなかった。

今後の見込みが把握できず、気温の上昇とともに衛生上の問題も懸念されるようになり、市は17日より土葬の検討を開始した。

【17日】市内で埋葬用地を協議。

【19日】シーブラザ金石で埋葬（土葬）の協議会を開催。

【20日】墓苑工事開始（30日に完了）。

【21日】「市本部情報」に「津波犠牲者の埋葬のお知らせ」を掲載。

〈身元が判明しない場合や、引き取る人がいない場合は、市が埋葬（土葬）する。埋葬は3月25日を予定する〉
しかし、身元が判明しなければ土葬するとの周知は、遺族に焦燥感と失望感を感じさせることとなった。「土葬」はあくまで仮埋葬の予定だったが、あとから掘り起こすさいに遺体を傷つけるのではないかといった不安が、遺族から上がった。

市は、土葬の準備を進めつつ、ぎりぎりまで、青森県や秋田県などへの火葬協力を依頼し続けた。

幸いにも、その後の身元確認が進んだことと、県内外の自治体による火葬受け入れの見通しがたったことから、市は方針転換し、すべての遺体を火葬することとした。

3.16,17

道路交通の確保 無料巡回バスの運行開始

震災により多くの自家用車が流失、ガソリン不足も常態化したことにより、被災者は、徒歩などで移動するほかに、安否確認や遺体確認、通院、買い物などのための交通手段の確保が課題となった。

国の補助制度を活用し、市教育センターと上大畑の間で無料巡回バス



3.17 13:40

栗林小学校体育館避難所・栗林町

の運行を開始した（16日から）。以降、運行区間を順次拡大した。

大槌町との 協力・連携

県知事の大槌町訪問に釜石市長が同行し、大槌町の副町長と面談。大槌町の現状と支援内容について協議を行った。大槌町副町長との協議により、市としても当町の復旧について全面的に協力することを確認した。

支援物資等を釜石経由で輸送実施するほか、担当職員を配置し、協力連携した。



3.17 16:50

釜石シーウェイブス RFC によるボランティア活動
シープラザ遊・鈴子町



3.16 8:50

無料巡回バス 鈴子広場付近・鈴子町
※8月1日からは、一乗車 100 円のワンコインバス運行に移行した



3.16 8:44

救護所の設置 鈴子広場・鈴子町

3月16日4時41分東北の太平洋沿岸で起きた巨大地震で、東北や関東では余震とみられる地震が相次いでいます。一方、多くの被災者が不自由な避難生活を送る被災地では、16日朝は氷点下の冷え込みとなるところが出ています。(NHK オンラインより)



いきいき生きる　いきいき生きる
ひとりで立って　まっすぐ生きる
困ったときは　目をあげて
星を目あてに　まっすぐ生きる
息あるうちは　いきいき生きる

はつきり話す　はつきり話す
びくびくせずに　はつきり話す
困ったときは　あわてずに
人間について　よく考える
考えたなら　はつきり話す

しっかりつかむ　しっかりつかむ
まことの知恵を　しっかりつかむ
困ったときは　手をだして
ともだちの手を　しっかりつかむ
手と手をつないで　しっかり生きる

釜石小学校校歌

【作詞】井上 ひさし

【作曲】宇野 誠一郎

避難所となった釜石小学校では、この校歌を朝6時45分のラジオ体操のあとに流していました。避難所にいた方のなかには「この校歌、いまの私たちの心境にぴったりです。避難所を出るときには、この校歌を歌って出ていきたいです」と話していた方もいました。



「教訓集」、「証言・記録集」作成の経緯

◆平成23年度

浸水状況、湾別の被災者の状況などの被災状況調査を実施して被災の概要を把握。また、職員の個別調査、各課の業務別状況調査を行い、市災害対策本部の対応の概要を把握した。さらに、市内全世帯を対象とした住民避難行動のアンケート調査分析を実施、検証を行った。

釜石市東日本大震災検証委員会を設置。これまでの検証から「釜石市東日本大震災検証報告書」を取りまとめた。

◆平成25年度

「避難行動」をテーマとして、住民等の避難行動に関する証言等の取りまとめ・分析を行った。併せて津波浸水区域の小中学校などの避難行動調査を行った。被災した住民を主体とした検証委員会を設置。検証報告書（津波避難行動編）を取りまとめた。

このほか、釜石市鶴住居地区防災センターにおける東日本大震災津波被災調査委員会を設置し「釜石市鶴住居地区防災センターにおける東日本大震災津波被災調査報告書」を取りまとめた。

3月、釜石市地域防災計画を改訂。

◆平成26年度

震災時の市災害対策本部の初動体制の対応状況、学校・子ども関連施設、避難所運営の実態などの課題、今後の方向性などを中心に調査・分析。加えて、地域の震災前の備え、震災時の動きと避難行動などを整理した検証報告書（災害対策本部編、学校・子ども関連施設編、避難所運営編、地域編）を取りまとめた。

◆平成27年度

これまでの検証報告書をもとに、津波から未来の命を守るための釜石の教訓及び住民の避難行動に関わる証言を、それぞれ市民向けの「教訓集」、「証言・記録集」として取りまとめた。

釜石市東日本大震災検証委員会委員（順不同）

●平成 23 年度

若崎 正光	釜石市
千葉 榮	釜石大槌地区行政事務組合 消防本部
及川 隆	国土交通省東北地方整備局 釜石港湾事務所
加藤 恒	国土交通省東北地方整備局 三陸国道事務所
熊谷 正和	岩手県沿岸広域振興局
和田 松男	釜石市消防団
荒井 芙美子	釜石市婦人消防連絡協議会
千葉 浩哉	釜石警察署
奥山 隆一	釜石海上保安部
千葉 吉美	東北電力株式会社 釜石営業所
矢浦 一衛	釜石市社会福祉協議会
川原 清文	唐丹地域会議
高橋 淳	鵜住居第2仮設団地自治会
荻野 哲郎	大渡町内会
柴田 渥	松原町内会
浦山 文男	新川原町内会
瀬戸 元	両石町自主防災組織
阿部 妙子	新浜町婦人消防クラブ
東野 武美	民生児童委員
伊藤 悦子	民生児童委員
金井 昌信	群馬大学大学院助教

●平成 25 年度

片田 敏孝	群馬大学 広域首都圏防災研究センター教授
金井 昌信	群馬大学 広域首都圏防災研究センター准教授
堺 茂樹	岩手大学 地域防災研究センター教授
小笠原 敏記	岩手大学 地域防災研究センター准教授
山崎 長栄	釜石市消防団
荒井 芙美子	釜石市婦人消防連絡協議会
柏崎 龍太郎	NPO法人釜石東部漁協管内復興市民会議
佐々木 一正	鵜住居まちづくり協議会
市川 淳子	鵜住居地区民生児童委員協議会
瀬戸 元	両石町自主防災組織
中村 信子	新浜町婦人消防クラブ
加藤 裕二	浜町1丁目町内会
合澤 洋子	東釜石地区民生児童委員協議会
柴田 渥	松原町自主防災会
前川 輝夫	平田町内会
上村 年恵	小白浜仮設団地自治会
池田 盛子	唐丹地区スポコンクラブ
川原 清文	唐丹地域会議
若崎 正光	釜石市
山崎 義勝	釜石市

●平成 26 年度・平成 27 年度

越野 修三	岩手大学 地域防災研究センター教授
菊池 義浩	岩手大学 地域防災研究センター特任助教
柳川 竜一	岩手大学 地域防災研究センター特任助教
山崎 長栄	釜石市消防団
佐々木 淳子	釜石市婦人消防連絡協議会
寺田 尚弘	釜石ファミリークリニック
菊池 亮	釜石市社会福祉協議会
藤原 たか子	岩手県建設業女性マネジングスタッフ協議会釜石支部
荒澤 幸子	社会福祉法人釜石愛育会鵜住居保育園
雲南 昌明	唐丹小学校PTA（平成 26 年度）
一関 秀美	唐丹小学校PTA（平成 27 年度）
柏崎 龍太郎	NPO法人釜石東部漁協管内復興市民会議
佐々木 雄治	根浜親交会
市川 淳子	鵜住居地区民生児童委員協議会
瀬戸 元	両石町自主防災組織
加藤 裕二	浜町1丁目町内会（平成 26 年度）
合澤 洋子	東釜石地区民生児童委員協議会
荻野 哲郎	大渡町内会
前川 輝夫	平田町内会
上村 年恵	小白浜仮設団地自治会
川原 清文	唐丹地域会議
安久津 吉延	松倉町内会
山崎 秀樹	釜石市



釜石湾全景（2011 年（平成 23 年）3 月 30 日撮影）



発行
2016年7月13日

釜石市
〒026-8686 岩手県釜石市只越町三丁目9番13号

監修
国立大学法人岩手大学 岩手大学地域防災研究センター

編集・制作
株式会社乃村工藝社
株式会社アートポスト